ISSN 2435-8231

尚美学園大学スポーツマネジメント研究紀要　第１号

BULLETIN OF SPORT MANAGEMENT SHOBI UNIVERSITY No.1

論文｜Articles

チアダンス文化論Ⅰ
―VERITAS のあゆみと作品研究―

A Study on Cheer Dancing as Contemporary College Sport Ⅰ:
The Case of VERITAS, Shobi University Women's Cheer Dance Team

坂本　邦彦
SAKAMOTO, Kunihiko
一般社団法人日本バレエ・ワークアウト協会会長
Japan Ballet Workout Association

北久保　みゆき
KITAKUBO, Miyuki
尚美学園大学女子チアダンス部コーチ
Shobi University
Women's Cheer Dance Team

平井　希依
HIRAI, Kie
尚美学園大学女子チアダンス部コーチ
Shobi University
Women's Cheer Dance Team

2020 年 12 月

Dec.2020

論　文

チアダンス文化論Ⅰ
――VERITASのあゆみと作品研究――

坂本　邦彦*
北久保　みゆき**　　平井　希依***

A Study on Cheer Dancing as Contemporary College Sport Ⅰ:
The Case of VERITAS, Shobi University Women's Cheer Dance Team

SAKAMOTO, Kunihiko
KITAKUBO, Miyuki　HIRAI, Kie

Abstract

This paper provides an overview of the history of cheerleading in the United States and analyzes the process by which a Japanese university team competes in various competitions with the goal of participating in collegiate championships held in the United States. Cheerleading became a part of American college sports in the late 1800s. With globalization, cheerleading and performance cheers spread to Japan in the 1980s. The activities of cheerleading teams in high schools and universities across Japan soon became widespread, and the Shobi University Women's Cheer Dance Team was established in April 2007. The cheer dancing team was named VERITAS, a Latin word meaning "truth," derived from the Bible. VERITAS follows the motto of the National Collegiate Athletic Association（NCAA）established in 1910 in the United States, which is an organization that oversees college sports. According to the NCAA, student athletes are students first and then athletes; thus, it sets strict academic standards for student athletes and member universities to manage academic performance. The performances at

*　一般社団法人日本バレエ・ワークアウト協会会長
**　尚美学園大学女子チアダンス部コーチ、株式会社ATORIE代表取締役、DREAM WODERLAND代表
***　尚美学園大学女子チアダンス部コーチ、株式会社ATORIEコーチ事業部主任

the competitions are best recorded as videos, but verbalized data, such as the narration of the work, evaluation by judges, and comments, are difficult to record. Recording should cover not only physical movements but also help analyze what movements mean in the overall context. Thus, in this study, performances in previous competitions were recorded by verbalizing the interpretation of both the judges and the performer. The study provides an overview of four performances that were part of overseas competition.

抄　録

米国で誕生したチアリーディングの歴史を概観し、それが日本に伝わる中で、一大学のサークルがチアダンスを通して全米大会出場を目標にさまざまな挑戦を行っていく過程とそこで演じられた作品を分析する方法を考察していく。

チアリーディングの始まりは、1800年代後半の米国の大学スポーツに見ることができる。やがてグローバルな規模で展開していく中で、1980年代から日本において競技としてのチアリーディング、パフォーマンスチアの世界が始まっていった。全国の高校・大学でサークル活動が活発化していく中で、2007年４月に尚美学園大学女子チアダンス部が誕生した。チーム名のVERITASベリタスは、真理を意味するラテン語で、ヨハネ福音書の言葉に由来する。米国では大学スポーツを統括する組織として、1910年に全米大学アスレチック協会National Collegiate Athletic Association（NCAA）が設立された。NCAAは、学生アスリートを競技者である前に学生であるとする立場を明確にしており、学業成績の管理にも力を入れている。VERITASもこの趣旨に沿った活動を心掛けてきた。大会での演技を記録する方法としては、映像によるものが最も理解しやすく、かつ、記録に残しやすい。しかし、そこには作品のストーリー、ジャッジによる評価、コメントなど言語化されたデータを合わせて記録することは困難である。身体の動きを客観的に記録することに留まらず、それが全体のコンテクストの中でどのような意味を持つか、演じる側の解釈とともにジャッジによる解釈も言語化することにより、これまでの大会演技を記録する試みを行った。本稿では、海外大会で演じた4つの作品研究を取り上げる。

キーワード

チアダンス（cheer dancing）／ チアリーディング（cheerleading）
大学スポーツ（college sport）／ 学生アスリート（student athlete）
ベリタス（veritas）

目　次

はじめに
1.　文化としてのチアダンス
　（1）　アメリカの大学スポーツとチアダンス
　（2）　日本におけるチアダンスの展開
2.　尚美学園大学女子チアダンス部の試み
　（1）　チーム名VERITASについて
　（2）　NCAAのAcademic ServicesとVERITASの試み
3.　VERITAS作品研究（海外大会編）
　（1）　作品研究（海外大会編１）：2016年４月
　（2）　作品研究（海外大会編２）：2017年４月
　（3）　作品研究（海外大会編３）：2018年４月
　（4）　作品研究（海外大会編４）：2020年２月
おわりに

礼儀作法のおぼえ方はダンスの場合と同じである。ダンスのできない人は、ダンスの規則をおぼえてそれに体の動きを合わせるのがむずかしいのだと思い込んでいる。ところがそれは外面だけのことである。肝心なことは、固くならず、心を乱さず、したがってびくびくせずに踊れるようになることなのである。これと同様に、礼儀作法の規則をおぼえることはとるに足らぬことである。そういう規則に合った行動がとれるとしても、それはまだ礼儀作法の入り口に立っただけのことである。体の動きがきちんと決まり、しなやかさがあり、固くなったりふるえたりしないようになることが肝心なのである。ちょっとふるえただけでも相手にはわかるのだ。それに、相手に気をもませておいて礼儀作法とはいえないではないか［アラン1972：257］。

―エミール・シャルティエ Emile Chartier―

はじめに

米国で誕生したチアリーディング／スポーツチア[1]が、大学スポーツの中で多様な展開を遂げてきた過程を概観し、それが日本に伝わる中で、一大学のサークルがチアダンスを通して全米大会出場を目標にさまざまな挑戦を行っていく過程とそこで演じられた作品を分析する方法を考察することが、本稿の目的である。本稿のタイトルは、「チアダンス文化論」とした。ここで、「チア」、「ダンス」、「文化」の3語の意味を確認しておく。

オックスフォード英語辞典The Oxford English Dictionary（OED）では、チアcheerの説明として最初に「顔 The face」が、ついで「顔の表情The look or expression of the face」が出てくる。そして、句としては、怒りや恐怖や恥の結果として「表情を変える to change cheer」例が示されている。「後期ラテン語のcaraが、顔、表情という意味で6世紀にアフリカ系詩人コリップスCorippusにより使われている。caraの語源は明らかでないが、ギリシャ語の頭kàpaから来ていると考えられるが、諸説ある。アフリカとスペインを経由してもたらされたようで、イタリア語や（ルーマニア語の）ワラキア方言Wallachianでは知られていない」［OED1989：74-75］。こうした、顔つき、表情、更に顔という意味では古語、あるいは既に用いられなくなった語彙として分類されている。今日では、名詞では、声援、歓声、喝采、励まし、喜びなどが、動詞では、人やチームに声援を送る、応援する、喝采する、元気づけるなどの意味で用いられている［ランダムハウス英語辞典1998］。

ダンスの定義、語源としては、小学館『日本大百科全書（ニッポニカ）』に次のようにある。「身体のリズミカルな動作により感情や意思、情景や状況などを表現する芸術。舞踊という日本語は『舞（まい）』と『踊り』の合成語として明治時代につくられたもので、英語のdance、フランス語のdanse、ドイツ語のTanzに相当する。これはサンスクリット語のtanha（『生の欲望』の意）を語源とし、ヒンドゥー・クシ、カフカスの両山脈を越えてエジプトに入り、tansaからチュートン系の言語tanzaとなった。いずれも、行為し、動き、生き、喜悦して踊る欲望をさすこ

（1） チアリーディングcheerleadingに関する用語は、時代、地域、大会開催団体により違いがみられるが、大きな枠組みとしては、スタンツやタンブリングなどのアクロバティックな要素を伴うもの（チアリーディング）とそれらを伴わないダンスを中心とするもの（パフォーマンスチア）にわけることができ、両者の総称としてチアリーディングという語が使われている。また、今日では、総称としてスポーツチアsport cheerが使われることがある。本稿のタイトルであるチアダンスcheer dancingは、日本におけるパフォーマンスチアの一部門として使われるとともに、ポンを使用したダンス全般を表す用語として広く使われている。内容的には、作品研究で取り上げるNCA & NDA大会におけるDance Team Performanceに近い。

とばである」［市川・國吉：舞踊・舞踊の定義］。また、ダンスを舞踊と訳した坪内逍遥は、舞踊を次のように分類している。「一口に舞踊というが、これを分類して見ると、舞、踊、振の三つになる。（中略）舞というのは、態度の悠揚として優美なのをいい、踊というのは、勇躍して拍子に合わせて活動するを意味する。又振といえば、いうまでもなく悲しむ振、怒る振、喜ぶ振、即ち劇的表情を意味するものと見てよい」［坪内1977：654］。ここで言われる「振」で表されるものが、前述のcheerに重なる部分があると考えられる。

デブラ・クレインDebra Craineとジュディス・マックレルJudith Mackrellは、『オックスフォードバレエダンス事典』の序文で次のように述べている。「現在、ダンス同士の境界線はたえず引き直されている。新たな研究や復元がバレエの歴史に関する私たちの知識を増やす一方、新しいコリオグラファーたちは、古典的美学の中にこれまでとは異なるさまざまな可能性を発見している。かつて欧米だけの現象であったモダンダンスは世界中で踊られ、各地で独自の語彙と概念を発展させている。同時に私たちは世界的な規模で、非西洋のダンスや主流に属さないダンスを舞台やスクリーンでますます多く見ることができるようになった」［クレイン、D. & M. ジュディス2010：序文2］。この事典で扱われているのは、世界的な規模で鑑賞されているダンスの実践と歴史であり、編者の関心は、劇場舞踊の研究にあることが明示されている。そうした中にあって、スポーツとかファッションのような直接ダンスとは関係ない項目をダンスの項目の背景を知るための興味深い補遺として取り上げていることは、西洋バレエをダンスの中心に捉えながらも、現代世界におけるダンスの多様性に対する認識の必要性を語っているといえる。

レイモンド・ウィリアムズRaymond Williamsは、「英語で一番ややこしい語を二つか三つ挙げるとすれば、cultureがそのひとつとして挙げられるだろう」［ウィリアムズ、R. 2002：83］と述べているが、エドワード・タイラーEdward Tylorによる文化の定義を起点として考えても、文化の意味、定義、さらには向き合い方に関しては多くの議論がなされてきた。

タイラーは、『原始文化*Primitive Culture*』第1章「文化の科学」において、文化を次のように定義した。「文化ないし文明とは、広い民族誌学的意味において、知識、信仰、芸術、道徳、法律、慣習、その他、社会の成員としての人間によって獲得された、あらゆる能力や習慣の複合的全体である」［Tylor 1871：1］。この定義により、人類のさまざまな文化を経験的、記述的に捉えることが可能になり、「未開」の文化も科学的考察の対象となった。19世紀後半は、進化という視点から人類史の再構成が盛んに行われたが、それは、西洋世界をゴールとする見方であった。そうした中で、フランツ・ボアズFranz Boasは、文化は、タイラーが述べるような個々の事柄の総合体ではなく、それらを形作る枠組みとして、また、記号の体系として理解する必要があると考えた。進化主義への懐疑から、それぞれの文化には、それぞれの意味があるとし、文化のコンテクストに即して文化を相対的に理解していく必要性を説き、文化相対主義を提唱した。また、クリフォード・ギアーツClifford Geertzは、文化はそれまで考えられてきたような直接観察可能なものとしてではなく、意味と象徴からなる体系であるとし、象徴に込められた意味をどう解釈していくかを論じた。その具体的方法論としてあげられたのが「厚い記述thick description」である。

文化に関しては、これを如何に定義するかというタイラーの時代以降は、文化の民族誌的記述はどうあるべきか、越境する文化をどう捉えるか、自然と文化の二項対立的視点への懐疑などなど、こうしたことに向き合わずに文化を語ることはできなくなっている。本稿では、二つの視点からチアダンスという文化を捉えてみたい。一つは、ボアズに代表される「文化相対主義」の視点である。この視点は、チームが海外遠征をしたときに経験的にその重要性を味わうこととなった。もう一つは、ギアーツの「厚い記述」の考え方であり、この視点を作品研究の中で生かすことができないか、考察していく。

1. 文化としてのチアダンス

（1）アメリカの大学スポーツとチアダンス

競技者を応援する、競技者に声援を送るという行為は、さまざまな民族文化の儀礼行為に広くみられる現象である。古代ギリシャにおける4大祭典競技会、ヌバ人のレスリングなど、競技者とそれを応援する側の関係は、人間の歴史の中で長い時を経て存在し続けてきた。チアリーディング／スポーツチアもまた、当初は、競技者と応援する側がはっきりと分かれたものだった。その始まりは、1800年代後半の米国の大学スポーツに見ることができる。やがて、競技としてのチアリーディング／スポーツチアの世界が誕生していく中で、応援する側が競技者として応援される側になるという逆転現象が生じていく。今日では、応援する側にあるとともに、競技者として応援される側でもあるという両義的性格を持つ。

チアリーディング／スポーツチアの歴史は、国際チア連合International Cheer Union（ICU）の「スポーツチアの歴史」History of The Sport of Cheer [2] に詳しい。以下、同書の記述をもとに、米国大学スポーツの中でチアダンスの世界が登場していく過程を概観する。

①　はじまり（1898年まで）

アイビーリーグ（米国北東部の名門私立大学）の記録によれば、1860年代の大学スポーツでは、学生はベンチに座ったまま応援していたとされる［ICU2018:2］。1877年2月22日発行のデイリー・プリンストン紙には、プリンストン大学Princeton University（アイビーリーグの一つ）の学生が、スタンドから応援している様子が記載されている。いわゆる「プリンストン・チア」といわれるもので、“Hurrah! Hurrah! Hurrah! Tiger! S-s-s-t! Boom! A-h-h-h!” という応援は、最初はゆっくりでしだいに速度を増していく機関車になぞらえてロコモティヴといわれた［Leonard, C. 2013］。プリンストン大学の卒業生トーマス・ピーブルズThomas Peeblesは、アメリカンフットボールの試合を応援する際に観客を巻き込んでいくというやり方を1884年にミネソタ大学University of Minnesotaに持ち込むことになった。1898年11月2日土曜日、ミネソタ大学の学生ジョニー・キャンベルJohnny Campbellは、ミネソタ大学対ノースウェスタン大学Northwestern University（シカゴ）のアメリカンフットボールの試合中、自分の席からフィールドに飛び降り、チャンツとチアで観客をリードし始め、観客を巻き込んで盛り上げていった［ICU2018:2］。“Rah, Rah, Rah! Ski-u-mah, Hoo-Rah! Hoo-Rah! Varsity! Varsity! Varsity, Minn-e-So-Tah!” というジョニー・キャンベルの「チアリーディング」は大成功を収め、ミネソタ大学は17対6で勝利し、ジョニー・キャンベルは史上初のチアリーディングアスリートになった［Satanovsky, G. 2015］。これを機に、1898年11月2日は、スポーツチア／チアリーディング誕生の日となった［ICU2018:2］。

②　チアリーディングは、成長と発展を続ける（1898年～1929年）

チアリーディングで試合を楽しむ文化は、米国中の大学スポーツや高校スポーツに広がってい

（2）ICUのサイトに掲載されている“History of The Sport of Cheer”参照。同サイトでは、スポーツチアの歴史を11の時代区分に分けて展開しているが、本稿では、大学スポーツに関連した部分を6つに分けて要約し、その概要を紹介していく。ICUのpdf.本文は、5ページからなるが、本稿の「①はじまり」～「⑥世界選手権の開催と今後の展開」に参照したページを記すとともに、ICU本文に記載のない内容に関しては、適宜本文中に参照箇所を明示した。また、図1と図2は、ICU本文には掲載されていないが、チアリーダーが男性中心から女性中心へと変化していくことを示す資料として参照した。
https://cheerunion.org.ismmedia.com/ISM3/std-content/repos/Top/docs/ICU_History_2018.pdf　2020年3月30日閲覧。

図１　史上初のチアリーダー ジョニー・キャンベル
（出所）'First Official Cheerleader', OnThisDay.com, online, 2020, available at: https://www.onthisday.com/photos/first-official-cheerleader（11April 2020）

った。観客をさらに楽しませ、ワクワクさせるための新たなテクニックが考え出され、サインボード、フラッグ、メガホン、ポンポン、アームモーション、スタンツ、タンブリングが加わることで、一層効果的なパフォーマンスができるようになった［ICU2018:２］。

③　パフォーマンスチア部門が加わる（1930年～1940年）

米国でのチアリーディング人気の高まりの中で、ドリルチームDrill Teamと呼ばれる新しいハイキックHigh Kickスタイルのパフォーマンスチア Performance Cheerが考案された。この新しいチアの形を作ったのは、ケイ・ティー・クロフォードKay Teer Crawfordとガッシー・ネル・デイビスGussie Nell Davisの二人であった［ICU2018:２］。

1930年、クロフォード女史は、テキサスのエディンバーグ高校Edinburg High Schoolで初めてドリルチームSeargenettesの演技を試合会場で演じ、やがて「ドリルチームの母」と呼ばれるようになった。1939年、東部テキサスのキルゴアカレッジKilgore Collegeのアメリカンフットボールの試合で、デイビス女史は、全員女性で構成されるチームの演技で観客を楽しませるようなハイキックのパフォーマンスであるランジェレットRangerettes[(3)]を発表した。これは大成功をおさめ、あっという間に有名になり、ドリルチーム/パフォーマンスチアのハイキックスタイルが米国中に広がることとなった［ICU2018:２］。

④　女性が多数派になり、チア教育を通してさらなる発展を遂げていく（1940年～1970年）

多くの女性アスリートが参加した1930年代のパフォーマンスチアの開始時でも、米国のチアリーダーの大部分は主に男性アスリートだった。 しかし、米国が1941年に第二次世界大戦に参戦し、多くの男性が戦争に従事するために米国を去ると、チアは大部分（推定85％）女性アスリートで構成されるように変わっていった［ICU2018:３］。

第二次世界大戦中は、チアは女性アスリート中心であったが、戦後、アスリートへのチア教育の必要性が唱えられるようになった。1949年、ローレンス・ハーキー・ハーキマーLawrence "Herkie" Herkimerは、テキサスティーチャーズカレッジTexas Teachers College（現サムヒューストン州立大学Sam Houston State University）で、チアリーディングのセミナーを開設した。１回目のセミナーには52人、２回目は350人のチアリーダーが参加したが、このことは、チアリーディング教育の必要性を物語っていた［ICU2018:３］。

ハーキマーは、全国にチアリーディング教育を効率よく正式に広めるために、全米チアリーダ

（３）"Kilgore College Rangerettes" https://www.rangerette.com/about/history 2020年３月30日閲覧。

図2　ローレンス・ハーキマーによるハーキージャンプ

（出所）Roberts, S. 'The New York Times; Lawrence Herkimer, Grandfather of Modern Cheerleading, Dies at 89', online, available at: https://www.nytimes.com/2015/07/04/sports/lawrence-herkimer-grandfather-of-modern-cheerleading-dies-at-89.html（30 Mar 2020）

ーズ協会National Cheerleaders Association（NCA）を立ち上げた。NCAは米国中の何万人ものチアリーダーにチアリーディング教育を実施していった。ハーキマーは、チアリーディングにチーム編成を導入し、ポンを新しい形に変え、スタント技術を向上させ、ハーキージャンプと呼ばれる技を考案するなど、チアリーディングテクニックの開発に努めた。チア教育への期待が高まる中で、新しい組織が次々と生まれていった。1950年には、ロバート・オルムステッドRobert Olmsteadが、ユナイテッド スピリット アソシエーションUnited Spirit Association（USA）をカリフォルニアで設立し、NFLの試合で始めてチアのハーフタイムショーを行った。1967年には、クロフォード女史がパフォーマンスチア振興のためにミス・ドリルチームMiss Drill Team USAをカリフォルニアで設立した。さらに、米国中の学校でチアリーディングとパフォーマンスチアの振興が図られていった［ICU2018:3］。

⑤　チアリーディングとパフォーマンスチアのグローバル展開（1970年～2000年）

1970年代から1980年代には、アメリカ全土でのチアリーディングとパフォーマンスチアの人気の高まりに加えて、大都市にある学校では、当時の都市文化とヒップポップ文化を反映した「アーバンチア」といわれる新しいスタイルのチアリーディングが始まった。パフォーマンスチアでは、これまでの「ハイキック」と「ポンポン」に加えて「ジャズ」と「ヒップホップ」が加わり、全米に急速に広がっていった［ICU2018:3］。

この時期、日本、チリ、ドイツ、イギリス、フィンランド、スウェーデン、ノルウェーなど、世界中のさまざまな国でスポーツチアへの関心が高まっていった。さらに、チアアスリートが急速に増加していく中で、大学や高校という学校団体だけでなく、オールスターAll Starといわれる民間のクラブチームが米国中に広まっていった。スポーツチアは転換期を迎え、いくつものチアリーディングの大会が、毎週末に米国全土の都市で開催されるようになった［ICU2018:4］。

⑥　世界選手権の開催と今後の展開（2000年～現在）

2003年に全米オールスター連盟United States All Star Federation（USASF）が設立され、競技ルールを統一し、チアリーディングワールドCheerleading Worlds（通称ワールド）を全米で最も権威のある大会とした。チアリーディングワールドという名称から米国以外のチームもこの大会への参加に関心を示し始め、世界中からのチーム参加に対応するために、国際オールスター連盟International All Star Federation（IASF）という名称がイベントのタイトルに併記されていった［ICU2018:4］。

スポーツチアの世界規模での組織化のために、IASFの主催で、ICUの第1回会議が2004年4月26日にフロリダ州オーランドで開催され、13ヵ国からの参加を見た。ICUの目的は、チアリーディングとパフォーマンスチアをスポーツとして世界規模で展開していくことであり、各国のチア連盟の発展を支援し、チアをスポーツとして認められるようにすることであり、ナショナルチームのためにICU世界選手権大会を始めるとともに、ワールドや他のイベントでのアスリートの参加機会を促進することである［ICU2018:4］。ICUは、世界中に100を超える各国のチア連盟をメンバーとし、90ヵ国以上でチア教育を実施し、さまざまな地域で競技大会を開催し、世界アンチ・ドーピング機構（WADA）に加盟し、スポーツ界で国際的に認められるよう活動を開始した。こうした世界規模での展開と同時に、パラチア/適応能力アスリートPara Cheer/Adaptive Abilities Athletes（身体障がいおよび知的障がいのあるアスリート）の部門、マスターズMasters部門の充実を図り、真の生涯スポーツとしてスポーツチアへの理解を広めていく活動を展開している［ICU2018:5］。

（2）日本におけるチアダンスの展開

米国のスポーツチアのグローバル展開の流れの中で、1980年代から日本において競技としてのチアリーディング、パフォーマンスチアの世界が始まっていった。パフォーマンスチアに関する団体としては、USAジャパン、JCDA、NPOミスダンスドリルチーム・インターナショナル・ジャパン、Cheer Japanがある。これらのうち、大会で大学編成を開催している団体について、設立年代順に公表されているデータを見ていく。

USAジャパンは、米国西海岸に本部を置くユナイテッド スピリット アソシエーションUnited Spirit Associationの日本支部として1988年に設立された。ホームページによると、「USAジャパンのスローガンは、『応援する人達を応援する』。日本のチアリーディング、ソング/ポン、ダンス競技において、国際的な基準で正しく安全な競技指導・育成を行い、競技を通して『団結力』や『思いやり』など精神面の大切さを伝えていくことを基本理念としています。そして、日本のチアリーダー、ソングリーダー、ダンサーへ実りある舞台を提供し、人間的成長のきっかけとなる存在を目指しています[(4)]」、とある。2018年11月15日に一般社団法人Cheer & Dance Educationを設立し、運営組織の変更を行っている。

JCDAは、日本チアダンス協会Japan Cheer Dance Associationの英文表記の略称である。2001年4月13日に任意団体として設立され、同年12月1日に第1回全日本チアダンス選手権大会を開催している。2009年7月28日に一般社団法人となっている。ホームページによると、「現在では、競技大会を始め、各地域でチアダンスのイベントを開催。幼児から大人までを対象にした技術講習会や、指導者に向けた講習会、指導者ライセンスコース、Team JCDAの育成・指導、テレビ・雑誌でのチアダンス特集の監修、教材DVD制作、海外大会へのチーム派遣など、多岐にわたっています[(5)]」、とある。

Cheer Japan：一般社団法人日本スポーツチア＆ダンス連盟Japan Federation for Sport Cheer & Danceは、「チアリーディングとパフォーマンスチアという競技の世界的発展と普及のため、そして日本代表チームとしてチアリーディング世界選手権に出場する目的のために、2010年2月に正式な一般社団法人として組織され、国際チア連合（ICU）に正式登録した団体[(6)]」である。2018年から隔年で開始されるFISU世界大学チアリーディング選手権大会に派遣する大学チーム

（4）「USA: USAとは」http://www.usa-j.jp/aboutusa 2020年10月7日閲覧。
（5）「JCDA: 日本チアダンス協会について」https://www.jcda.jp/about/index.html 2020年4月16日閲覧。
（6）「チアジャパンとは」http://www.jfscheer.org/cheerjapan.html 2020年4月16日閲覧。

の選考会を開催し、同年10月、ポーランドのウッチで開催された大会に日本代表＜チアリーディング・パフォーマンスチア＞を派遣した。これは、日本チアリーディング協会との共同派遣であった（チアリーディング：金メダル1個、銀メダル1個獲得／パフォーマンスチア：金メダル4個、銀メダル1個獲得）(7)。

これら3団体は、新型コロナウイルス感染症対策として、2020年5月25日付で「チアリーディング練習再開に向けたガイドライン」を共同策定し、公表している。その後、7月9日付で「チアリーディング練習のガイドライン」（第2版）、9月18日付で同（第3版）を公表している。また、Cheer Japanは、2020年8月1日付で、ホームページのニュース「体制について」で次のように述べている。「『一般社団法人日本スポーツチア＆ダンス連盟』は、日本国内におけるチアリーディング競技の更なる発展のため、また、連携体制強化を促進すべく『一般社団法人日本チアダンス協会』と『一般社団法人Cheer & Dance Education』の二団体が本連盟の法人会員になりましたことをここにご報告いたします(8)」。日本のチアリーディング／スポーツチアの世界が、国内外の大会においてさらに発展する契機となることが期待される。

2. 尚美学園大学女子チアダンス部の試み

（1）チーム名VERITASについて

チーム名のVERITASベリタスは、VERITAS LIBERABIT VOS「真理はあなたたちを自由にする」というヨハネ福音書8章32節の言葉に由来する。この言葉は、聖書の一節としてしばしば取り上げられてきたが、聖書の解釈とは異なる人文主義的な意味でも、国内外の大学や図書館一般の銘文として広く使用されてきた。女子チアダンス部のチーム名選考にあたり、国立国会図書館東京本館ホールの図書出納台の上方に刻まれているこの銘文をラテン語表記したものを採用した。

①　国立国会図書館法前文におけるVERITAS

国立国会図書館東京本館ホールの図書出納台の上方に「真理がわれらを自由にする」という銘文が刻まれている。その右側にはギリシャ語で「Ｈ ＡΛＨΘＥＩＡ　ＥΛＥＹΘＥＰΩΣＥＩ ＹＭＡΣ」とある。この言葉が、図書館のいわば中心部分に刻まれた背景は、昭和23年法律第五号として同年2月9日に公布された国立国会図書館法前文にある。そこには、「国立国会図書館は、真理がわれらを自由にするという確信に立つて、憲法の誓約する日本の民主化と世界平和とに寄与することを使命として、ここに設立される(9)」とある。ここでいう「真理」は、ラテン語で「VERITAS」である。「この言葉は、法案の起草に参画した羽仁議員がドイツ留学中に見た大学の銘文に由来し、その銘文は、新約聖書の『真理はあなたたちを自由にする』（Ｈ ＡΛＨΘＥＩＡ ＥΛＥＹΘＥＰΩΣＥＩ ＹＭＡΣ　ヘー　アレーテイア　エレウテローセイ　ヒュマース　ヨハネによる福音書8:32）に由来する(10)」といわれる。

羽仁は、『図書館の論理―羽仁五郎の発言』の中で、前文にこの銘文を用いた背景について述べている。国立国会図書館の設立の趣旨は、従来の日本の根強い官僚主義支配の打破にある。国会が国の最高政治機関として機能するためには国会に国の政治調査資料がなければならないのだが、それは、官僚や軍部の手中にあって国民を代表する議員には何もなかった。アメリカには議

（7）「Cheer Japan沿革」https://jfscheer.org/about/ 2020年4月16日閲覧。
（8）「Cheer Japan体制について」http://jfscheer.org/news/news20200801/ 2020年8月10日閲覧。
（9）「国立国会図書館法」https://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws_search/lsg0500/detail?lawId=323AC1000000005#1 2020年4月7日閲覧。
（10）「国立国会図書館使命・役割、コラム『真理がわれらを自由にする』」https://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/missionandroles.html 2020年4月7日閲覧。

図3　真理がわれらを自由にする　　**図4　Η ΑΛΗΘΕΙΑ ΕΛΕΥΘΕΡΩΣΕΙ ΥΜΑΣ**

（出所）「国立国会図書館使命・役割、コラム『真理がわれらを自由にする』」
https://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/missionandroles.html
転載承認：2020年９月８日「国図電2001064-1-175号」

会図書館があり、相当の成績を上げている。そこで、アメリカ議会図書館とアメリカ図書館協会の援助を受けて、「新しい日本の国立国会図書館法の立法にあたった。同法の前文に『真理がわれらを自由にする』と記されているが、これはとくに私の原案が採択されたものである」［羽仁1981：131］。また、羽仁がこの言葉に初めて出会ったのは、フライブルク大学の図書館であった。「この言葉を知ったのは、30数年前ヨーロッパで勉強した時なんです。ある時旅行してフライブルク大学に行ったら、その大学図書館、今でも覚えていますが、あの地方の赤い岩で出来た建築で―その玄関の上に“Wahrheit macht man frei”と書いてあった。この言葉は元来聖書の言葉で、更にさかのぼれば、誰かの言葉でしょう」［羽仁1981：140］、とある。

この言葉は、ヨハネ福音書の一節に由来し、キリスト教精神を反映したものとして使われる場合と、宗教的倫理観からではなく、むしろ人文主義的視点から大学などの教育研究機関の銘文として使われるケースがある。また、キリスト教系大学に見られるように、その両方の意味で使われる場合がある。この言葉が国立国会図書館に掲げられてからさまざまな議論がされてきたが、その中で、フライブルグ大学図書館の銘文の由来を紹介した一文が注目される。「1911年、講義棟新築の際に正面の装飾として、『学生達に、講義棟で探求し、発見すべきものが何であるかを想起させる格言』として、また 入口脇のホメロスとアリストテレスの像にマッチする言葉としてDie Wahrheit wird euch frei machen. という言葉が刻まれたが、ここでも、このヨハネ福音書に由来するこの言葉は、キリスト教の教義としてよりも、むしろ人文主義的、自由主義的意味に解釈されている」［稲村・高木1989：4-5］、とフライブルグ大学からの回答を紹介している。羽仁が起草した国立国会図書館法前文、および、出納台上に刻まれた銘文が、聖書の解釈とは異なる人文主義的な意味で使われていることは明らかである。その意味では、フライブルグ大学の考え方と同じ方向性を持つといえる。しかしながら、「羽仁氏をはじめとする立法者の意図あるいは館法の中では、この言葉は図書館一般の理念ではなく国会の調査機関としての国会図書館の理念としてとらえられていた」［稲村・高木1989：６］。だが、この言葉は、次第に大学、あるいは、図書館一般の理念ともみなされるようになっていった。

②　ヨハネ福音書８章32節におけるVERITAS

「真理はあなたたちを自由にする」という言葉は、新約聖書ヨハネ福音書８章32節に書かれている。新約聖書はギリシャ語で書かれた27の文書からなり、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの４福音書から始まる。四福音書対観表によると「真理はあなたたちを自由にする」という言葉は、ヨハネ福音書にだけ記載がある［アーラント、荒井、川島2000：210］。次にあげるのは、日本聖書協会による新共同訳である。30節から36節までを参照する。

30これらのことを語られたとき、多くの人々がイエスを信じた。31イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。32あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする（下線筆者）。」33すると、彼らは言った。「わたしたちはアブラハムの子孫です。今までだれかの奴隷になったことはありません。『あなたたちは自由になる』とどうして言われるのですか。」34イエスはお答えになった。「はっきり言っておく。罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である。35奴隷は家にいつまでもいるわけにはいかないが、子はいつまでもいる。36だから、もし子があなたたちを自由にすれば、あなたたちは本当に自由になる［日本聖書協会1996：（新）182］。

ヨハネ福音書に記されたこの言葉は、キリスト教の理念を示すものとして多くの礼拝説教に使われるとともに、キリスト教の世界に留まらず、特に大学、図書館などのモットーとして広く使われることとなった。

③　国内外の大学の銘文に見られるVERITAS

◇1　米国の大学の銘文に見られるVERITAS

ローレンス・ウルダンLaurence Urdangが編集した『モットー *MOTTOES*』は、米国の大学が掲げている標語、銘文を集めたものである。VERITASを標語として使用している例が、10大学で見られる(11)。

Veritas et amicitia *Latin* ‘Truth and friendship’

Jones College, Jacksonville, Florida.

Veritas liberabit *Latin* ‘The truth will make you free’

—Bodenham（of Rotherwas）, Lafayette College, Easton, Pennsylvania.

Veritas liberabit vos *Latin* ‘The truth will set you free’

—Saint Augustine’s College, Raleigh, North Carolina.

Veritas / libertas *Latin* ‘Truth / liberty’

—Manatee Jr. College, Bradenton, Florida.

［Urdang, L.（ed.）1986：476,673］

Veritas *Latin* ‘Truth’

—Easton; Harvard University(12), Cambridge, Massachusetts; Dominican College of Blauvelt, Orangeburg, New York.

Veritas cum liberatate *Latin* ‘Truth with liberty’

Winthrop College, Rock Hill, South Carolina.

［Urdang, L.（ed.）1986：672］

Veritas et virtus *Latin* ‘Truth and virtue’

—Mississippi College, Clinton, Mississippi.

Veritas / mores /scientia *Latin* ‘Truth / morals / knowledge’

—East Texas Baptist College, Marshall, Texas.

Veritas vincit *Latin* ‘The truth overcomes’

—Southern Missionary College, Collegedale, Tennessee.

（11）『モットー』については、［稲村・高木 1989：5-6］で紹介されている。ラテン語のVeritasの使用例が2例あげられている。

（12）“Harvard University Shield” https://www.harvard.edu/about-harvard/harvard-glance/history 2019年2月9日閲覧。VERITASの文字は3冊の本（聖書）に記され、これは三位一体を表しているとされる。

［Urdang, L.（ed.）1986：673,766,811］

Veritas vincit *Latin* ‘The truth conquers’

—Southern Missionary College, College ale, Tennessee, French, Keith, Paeker（Co. Cork）, Wright.

［Urdang, L.（ed.）1986：767］

これらの標語では、VERITAS（truth）に加えて、friendship、free、liberty、virtue、morals、knowledgeなどの語が使用されている。また、COVID-19に関する研究、情報発信で広く知られている米国メリーランド州ボルチモアのジョンズ・ホプキンズ大学Johns Hopkins Universityの校章には、VERITAS VOS LIBERABITの文字が刻まれている[13]。このほかにも多くの大学でVERITASが標語として取り入れられている。

◇2　日本の大学の銘文に見られるVERITAS

現在、日本の大学の約1割がキリスト教系大学だが、大学、または、大学図書館の標語の中にVERITASを用いているケースが少なくない。

明治学院大学は、建学の精神「キリスト教による人格教育」のもと、創設者ヘボンが生涯貫いた精神“Do for Others（他者への貢献）”を教育理念に掲げている[14]が、図書館のモットーは「The Truth Shall Make You Free（真理はあなたたちを自由にする）聖書ヨハネ伝8：32」であり、1950年代に当時の高谷道男図書館長により図書館入口に英語で掲げられた[15]。白金図書館はギリシャ語で、横浜図書館はラテン語でホール正面に掲げられている。関西学院大学では、神学部紹介冊子のタイトルが『School of Theology～Veritas liberabit vos（真理はあなた方を自由にする）～』であり、神学部紹介動画にもこの言葉が記されている[16]。上智大学では、校章にLとVの字が刻まれているが、「中央にしるされた文字は、本学の標語『真理の光』Lux Veritatisの頭文字[17]」を意味している。

キリスト教系大学ではないが、大学図書館の標語としてVERITASを用いている例がある。

日本女子大学では、1964年に開設された目白図書館正面玄関上に、VERITAS VIA VITAEという言葉が刻まれていた。VERITASは真理、VITAEは生、生命、人生を意味するラテン語である。この言葉の解釈についてはさまざまに論じられて来たが、「昭和58年2月に当時の福田陸太郎館長（5代）の裁断により、『生を通しての真理』とする統一見解が出され、これ以降の図書館オリエンテーション、大学案内、その他の紹介文の中で、専らこの定訳が使われるようになった」［島﨑2013：2］。これに対して、ラテン語の構文、類似した銘文の英語での使用方法、大学としてのメッセージの適切性などの分析から、「VERITAS VIA VITAEを従来のように『生を通しての真理』と訳すよりも、『真理は生の道』という訳文にして表に出したほうが、本学図書館の玄関で私たちを迎えてくれる顔として、より気品があり、より高尚で、より理想的な『顔容』となるように私には思われる」［川端2014：57］との見方がある。そうした中で、「本学図書館にこの標語を選定された上代タノ先生は、“VERITAS VIA VITAE”を一つの固定した語訳に制約してしまう必要はない、とのお考えだったようであり、（中略）これまでの固定した語訳から一歩引いて、もっと自由な気持ちで“VERITAS VIA VITAE”を受け止めることが、大学図書館として、あるい

（13）President, Ronald J. Daniels, "Truth will set you free," https://hub.jhu.edu/magazine/2017/winter/convocation-address-the-truth-will-set-you-free/ 2019年2月9日閲覧。

（14）「明治学院大学教育理念」https://www.meijigakuin.ac.jp/about/ 2020年4月27日閲覧。

（15）「明治学院大学図書館の沿革」https://www.meijigakuin.ac.jp/library/about/history/ 2020年4月27日閲覧。

（16）「関西学院大学神学部」https://www.kwansei.ac.jp/s_theology/s_theology_015664.html 2020年4月27日閲覧。

（17）「上智大学校章と校名の由来」https://www.sophia.ac.jp/jpn/aboutsophia/sophia_spirit/badge-song/badge.html 2020年4月27日閲覧。

図5　日本女子大学図書館 VERITAS VIA VITAE
（出所）日本女子大学図書館撮影提供
掲載許可：2020年10月13日

は学園関係者としても求められているのではないか」［島﨑2013：2］、という見方は、大学とは、大学図書館とは何かを考えるうえで、重要な指摘である。日本女子大学は、2019年4月3日に目白キャンパスに新図書館をオープンした。新図書館にも引き続きこの銘文が掲げられている［日本女子大学図書館2019：8］。

このほかにも、東京都立大学図書館本館正面上方に、VERITAS VOS LIBERABITの文字が刻まれている[18]など、非キリスト教系の大学においても、VERITASの語を銘文として使用している例がみられる。

（2）NCAAのAcademic ServicesとVERITASの試み

①　NCAAのAcademic Services

全米大学アスレチック協会National Collegiate Athletic Association（NCAA）は、米国の大学スポーツを統括する組織として1910年に設立された。設立の背景には、大学における競技スポーツ活動の商業化とそこで生じる不正の問題、スポーツの安全性への懸念の広がりがあり、大学間を横断したより強い規制が求められていくという時代状況があった［松尾ほか2018：50-53］。NCAAの歴史に関しては多くの論考があるが、110年の歴史を経てNCAAホームページに優先事項として掲げられているのは、ACADEMICS（学業）、WELL-BEING（安全と健康）、FAIRNESS（公平性）[19]の3つである。これは、NCAAのあゆみの中で繰り返し議論されてきた事項であるが、この中でも学業に関する取り組みは、日本の大学スポーツにとり示唆に富んだものといえる。NCAAが実施する学生アスリートに対する支援内容は多岐にわたるが、本稿では、学業Academic Servicesに関することを中心に取り上げていく[20]。

NCAAは、「学生アスリートを『競技者である前に学生である』とする立場を明確にしており、学生アスリートや加盟大学に対して厳しい学業基準を設け学業成績の管理に力を入れている」［長倉2018：33］。学業に関する3つの基準として示されているのは、成績、1年間の修得単位数、卒業要件の充足率[21]であり、大学に報告を義務付けている。GPAを含む学業成績だけでなく、

（18）「東京都立大学図書館フォトギャラリー」https://www.lib.tmu.ac.jp/ 2020年4月27日閲覧。
（19）“NCAA：OUR PRIORITIES”http://www.ncaa.org/about/what-we-do/academics 2019年8月23日閲覧。
（20）この他に、Financial Assistance奨学金の提供、Wellness & Insuranceスポーツ科学研究による安全の促進・スポーツ保険の提供・栄養食の提供、Personal & Professional Developmentリーダー育成及び人間形成プログラムの提供・キャリア支援などがある。［文部科学省 2018］参照。
（21）“NCAA：CONTINUING ACADEMIC SUCCESS”http://www.ncaa.org/about/what-we-do/academics 2019年8月23日閲覧。

20/40/60/80ルール[22]といわれる卒業要件に対する年間修得単位数の比率を設定し、これを満たさなかった場合、奨学金の停止など制裁が課されることになる。また、NCAAは大学への配分金を競技成績に基づいて振り分けてきたが、2019-2020年度からは、学業成績による奨学金制度を導入していくことになった[23]。このように、個人としては、基準を超えないと部活への参加制限、あるいは、参加自体が認められなくなり、また、チームとしては、成績が悪いと試合などへの参加制限が行われることになる［文部科学省2018］。また、学生アスリート向けチューター、補習、カウンセリングなどの制度が導入されている大学もある。

こうしたNCAAの実践に対して、日本の大学スポーツ改革の一環として日本版NCAA創設の動きが2010年代半ばからみられることになった。「日本版NCAAのあり方について検討する際には、大学における競技スポーツ活動を産業として発展させるということを中心とするのではなく、競技スポーツ活動を高等教育の一部としてどのように扱っていくのか、得られた収益をどのように分配し、どのように学生アスリートやその他の学生の成長に寄与するのかということが議論されるべきである」［松尾ほか2018：63］、との指摘は重要である。文部科学省やスポーツ庁による検討のほかに、大学の中には独自に改革に着手するケースがみられるようになった。そうした中で、2019年3月、222大学が加盟する一般社団法人大学スポーツ協会Japan Association for University Athletics and Sport（UNIVAS）が設立された。

② VERITASの試み

尚美学園大学女子チアダンス部では、2018年6月1日開催の第19回定期総会において二つの内規を制定した[24]。一つは、学業に関するもので、もう一つは、成績優秀者に対する褒賞制度である。

◇1 VERITASアカデミック・パフォーマンスに関する内規

学業に関する内規として、セメスターごとの修得単位の基準[25]とGPAの基準を定めた。

○セメスターごとの修得単位の基準

・基準単位（卒業要件にかかわる単位）

学年	春学期終了時	秋学期終了時
1年	15単位	30単位
2年	45単位	60単位
3年	75単位	90単位
4年	―	124単位

各年次、セメスターにおいて、基準単位以上の単位を修得すること。

基準単位は、卒業要件にかかわる単位とし、自由科目はこれに含めない。

・基準単位を下回った場合

初めて下回った場合

次セメスターの学習計画書を提出する。

---

(22) 2004年に制定されたAcademic Progress Rate（APR）制度では、大学1年次終了までに卒業要件の20％、2年次終了までに40％、3年次終了までに60％、4年目以降に80％の単位修得を充たすように学生アスリートは要求される。［長倉2018：34］参照。

(23) “NCAA：REWARDING TEAM SUCCESS”http://www.ncaa.org/about/what-we-do/academics 2020年8月10日閲覧。［長倉2018：38-42］に、NCAAの1880年代から今日までの学業管理制度とDivision 1の配分金制度について紹介されている。

(24) VERITASのホームページで公開している。「ベリタスについて」https://www.shobi-u.ac.jp/veritas/about/about.html。

(25) 「早稲田アスリートプログラム（WAP）、学業情報管理」pdf.pp.24-28参照。https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/005_index/shiryo/__icsFiles/afieldfile/2016/05/23/1370914_03.pdf 2018年5月7日閲覧。

連続する2セメスター以上で下回った場合

次セメスターの学習計画書を提出し、その内容に応じて次の制限のいずれか一つ、または、両方を課す。

・練習の制限（進級・卒業を優先させた時間割の編成を行う。）

・大会エントリーの制限（選手としての登録を行わない。）

○セメスターごとのGPAの基準

・基準GPA

累計GPA2.0以上。

・GPA2.0未満の場合

初めてGPA2.0未満になった場合

次セメスターの学習計画書を提出する。

連続する2セメスター以上でGPA2.0未満になった場合

次セメスターの学習計画書を提出し、その内容に応じて次の制限のいずれか一つ、または、両方を課す。

・練習の制限（進級・卒業を優先させた時間割の編成を行う。）

・大会エントリーの制限（選手としての登録を行わない。）

◇2　VERITASスカラーシップに関する内規

成績優秀者に対する褒賞制度を設けた。

○スカラーシップ制度

・対象となる学年、セメスター、GPA

学年	第1期6月徴収分	第2期10月徴収分	第3期2月徴収分
1年	―	1年春学期GPA	―
2年	1年秋学期GPA	2年春学期GPA	―
3年	2年秋学期GPA	3年春学期GPA	―
4年	3年秋学期GPA	―	―

・対象者

各セメスターにおいて、「アカデミック・パフォーマンスに関する内規」に定める基準単位を満たし、且つ、対象となるセメスターを通してVERITASの部員であるものの中から、GPA上位3名にスカラーシップを授与する。

ただし、1年次においては、春学期の定期総会において入部を認められたものは、当該セメスターを通して部員であるとみなす。

・スカラーシップ内容

スカラーシップは、部費4か月分の免除をもってこれに代える。

春学期GPAに関しては、第2期10月徴収分を免除する。秋学期GPAに関しては、第1期6月徴収分を免除する。

ただし、スカラーシップの対象となるのは、3年次秋学期までのGPAとし、4年次のGPAは対象としない。

③　VERITASアカデミック・パフォーマンスとスカラーシップの背景にあるもの

2016年4月のNCA & NDA全米学生チアダンス選手権大会Dance Team Performance Division Ⅲで2位となったのは、テキサス州の大学ブリンカレッジBlinn Collegeであった。大会当日まで、VERITASとしてはブリンカレッジのことを知らなかったし、ブリンカレッジとしても日本のShobi University VERITASの存在など知る由もなかったと思われる。帰国後、ブリンカレッジについて調べてみた。1883年に設立され、19,000人を超える学生を擁するアメリカでも有数なコミ

ュニティカレッジであった[26]。アメリカの大学で学生アスリートとして活躍するためには、大学への入学が認められるとともに、チームへの入部試験に合格しなければならない。そのための要件を示したサイトに、「ブリンカレッジの学生は、2.0の累計GPAを持ち、学業を修めていかなければならない[27]」、との記載がある。NDA大会で優勝トロフィーを競ったダンスチームのメンバーは、選手登録に際し全員がこれを充たしていたと推察される。同サイトを閲覧していると、頻繁にNCAAの文字が表れてくる。アメリカの学生アスリートが、学業面での支援をNCAAから得ていることを彷彿とさせるものがある。NDA大会では、米国外からのチームは在籍学生数によりエントリーするDivisionが決められ、VERITASはDivision Ⅲに位置付けられた。コミュニティカレッジもDivision Ⅲに分類されるため、VERITASとブリンカレッジが競うことになった。VERITASのようなナショナルチームも、当然のことながらジャッジのスコアシートは米国チームと全く同じであり、全てにわたり同じ条件でステージでのパフォーマンスを行った。他チームのメンバー、観客、スタッフからも温かい声援を受けることができた。多様性を受け入れるアメリカの歴史を肌で感じた思いである。VERITASのメンバーがこのことを体験できたということは、優勝トロフィーを持ち帰ったことよりもはるかに意味があるように思う。さて、海外からのチームを平等に扱ってくれたのであるから、アメリカの学生アスリートが大会にエントリーする際に当然充たしている条件を、日本のチームも充たしている必要がある。とくに、「2.0の累計GPAを持ち、学業を修めていかなければならない」という点は、大会にエントリーする以前の問題である。そこで、「VERITASアカデミック・パフォーマンスに関する内規」を制定し、部活の中で、学業もしっかり行っていく体制を目指した。この内規の制定は、たまたまアメリカで出会ったブリンカレッジのメンバーから学んだことである。

学業面で努力した部員に対する顕彰として、スカラーシップ制度を制定した。年2回開催される定期総会の時に、前セメスターにおけるGPA上位3名に賞状を渡し、部費4か月分を免除するという内容である。スカラーシップと呼べるほどの内容ではないかもしれないが、部員全員の前で表彰されることに意味がある。部員たちが、学生アスリートであることを再認識する機会となれば、この目的は果たしているといえる。

3. VERITAS作品研究（海外大会編）

競技としてのチアダンスは、エントリーする大会により部門の設定や規定なども異なるため、振付・衣装・メンバーは大会毎に決められる。一つの大会の予選から決勝にかけては、予選のスコアシートを参考にしながら修正を加え、決勝大会において最高のパフォーマンスができるように仕上げられていく。そのため、全く同じ演技内容で他の大会に出場することはない。ただし、大会日程が近接していてエントリーする部門が同じ場合、あるいは国内大会での演技がもとで海外大会の推薦を得た場合は演技内容がかなり重なることはある。しかし、メンバーが替わりながら何年にもわたり同じ振付、曲による作品が大会で演じ続けられることはない。その意味では、直線的に経過していく時間の流れの中で、一つの作品は過去の一点に留まり続けていくことになる。一つの作品がチームを育て、次の作品に向けてより良いパフォーマンスを創り出していくと考えれば、チアダンスという競技においては作品の一回性は意味があるのかもしれない。ある時、大会へ向けての振入れが始まった日、メンバーの一人がノートにしきりと書き込みをしていた。コーチ[28]による振付をノートに書き留めておくフォーメーションノートであった。これは、

（26）“Blinn College District”https://www.blinn.edu/about/index.html 2020年 8 月10日閲覧。
（27）“Blinn College Buccaneers Dance”https://www.buccaneersorts.com/sports/dance/tryouts 2020年 8 月10日閲覧。

ステージ上の位置関係を表す2次元の表記である。これに、メンバーの3次元の体の動きが合わさり、作品が構成されることになる。そして、スマートフォンやi Padの動画データなども利用しながら、コーチとメンバーの間で振付内容が共有されていく。最終的にその作品のデータとして記録に残されるのは、大会会場で撮影された演技になる。

「舞踊を記録する様々な記譜法がある。それらは、VTRやフィルムによる舞踊の記録が容易に行えるようになった現在でも、依然として利用され続けている。たしかに、映像による記録だけでも用が足りるものに関しては、映像記録へと置き換わってきていると言えるかもしれない。しかし、舞踊には、映像だけでは、記録できないものがある（下線筆者）。これを記録するのが、舞踊記譜法である」［中村2002：89］。

「舞踊を記録することは古くから試みられ、古代エジプトでは象形文字で舞踊を記述したといわれる。今日『振付け』を意味する英語choreographyは、ギリシャ語のchoros（群舞）とgraphios（描く）からきており、『舞踊を記録する』という原義（下線筆者）である」［市川・國吉：舞踊譜］。

文化人類学の研究では、フィールドワークにより得られたデータを言語化し、これを1次資料としてそれぞれの民族文化の分析を行っていく。これを、民族誌ethnographyと言い、語義をたどれば、ethnos（民族）とgraphios（描く）からなる。このことから、「振付」を意味する英語choreographyは、「振付誌」あるいは「舞踊誌」と表現することができよう。その時、映像だけでは、記録できないものを記述するためには、graphios（描く）ことの質が問題になる。ギアーツは、『文化の解釈学*The Interpretation of Cultures*』において、「厚い記述thick description」という概念を提示している。ギアーツの「厚い記述」とは、起こった出来事や行動を客観的に記述するだけではなく、どうしてそのような行動をするのか、その行動にはどのような意味があるのかをコンテクストに沿って解釈することを通して記述することである［ギアーツ1987：3-56］。

チアダンスの演技を記録に残す方法としては、映像による記録が最も理解しやすく、かつ、記録に残しやすい。しかし、そこには作品のストーリー、ジャッジによる評価、コメントなど言語化されたデータを合わせて記録することは困難である。VERITASでは、コーチからその作品のストーリーが語られることがしばしばある。これは、選手が演技内容を理解するうえで、非常に大きな要素となっている。すなわち、演技全体のコンテクストが言語化されることで、一つ一つの動作に意味を与えていくことになる。また、ジャッジによるスコアシートは、国内外のどの大会でもチームごとに開示され、点数だけでなく、項目ごとの詳細なコメントも提供される。そこには、テクニックに関する評価のみならず、ジャッジが感じたさまざまなインプレッションが記されている。これらのことは、映像記録の中にはデータとして残すことができないが、作品全体を記録に残すには欠かせない部分であり、これらをまとめて言語化することは行われてこなかった。この部分に着目することは、身体の動きを客観的に記録することに留まらず、それが全体のコンテクストの中でどのような意味を持っているか、演じる側の解釈とともに、ジャッジによる解釈も言語化することにより、「厚い記述」を可能にするのではないかと考えられる。そこで、これまでの大会演技を言語化する試みを行った。この試みは、舞踊記譜法や舞踊譜の目的、方法

（28） VERITASのコーチは、本稿共著者である北久保みゆきと平井希依が担当している。VERITASの大会演技作品は、すべて北久保コーチの振付による。これまで、高校、大学、クラブチームで多くの作品の振付を担当し、2018年10月に開催された国際大学スポーツ連盟主催の第一回世界大学チアリーディング選手権大会では金メダルを獲得している。また、振付師に贈られるコリオグラフィー賞を国内外の大会で9回受賞している。現在、株式会社ATORIE代表取締役、DREAM WODERLAND代表である。平井コーチは、アスリートとして、全日本チアダンス選手権大会8連覇の実績を有する他、国内外で数多くの優勝実績がある。現在、株式会社ATORIEコーチ事業部主任である。

とは大きく異なるが、チアダンスという文化を描く一つの方法としてその可能性を探っていく。

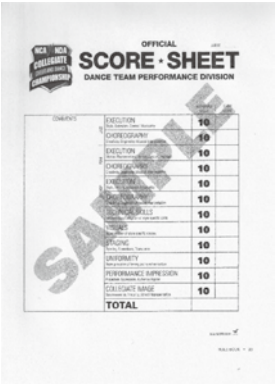
2018年の秋、部員に次のミッションを提示した。2016年４月～2018年４月までに演じた5作品に対して、①ポイントとなるフォーメーションを10～20程度選定し方眼紙上に記し、②フォーメーションごとの演技内容、ストーリーを文字化し、③大会のスコアシートを予選と決勝を比較しながらまとめ、④演技全体を通して自分たちが感じたことをまとめる、という内容であった。その後、部員から提出されたデータをもとに議論を重ね、２年の時を経て、10作品をまとめることができた。まだまだ改善すべき点は多々あるが、さらに議論を進めるためには、一度公表することも意味があると考え、ここに掲載することにした。

各作品研究は、冒頭で大会に関するデータ（大会名、部門、開催日、会場、結果）を示したのち、「パフォーマンスとスコアシート分析」、および、「作品の構成と背景」において作品ごとの内容を言語化することを試みた。「パフォーマンスとスコアシート分析」では、前半で、演技内容を10～20に分割したうえで、番号（①、②…）、カテゴリー（Jazz、Hip Hop…）、使用曲、演技静止画、フォーメーション、振付内容と意図を記載し、後半で、スコアシートに記されたジャッジのコメントを予選と決勝に分けて記した。「作品の構成と背景」では、作品のストーリー、音源、振付、衣装などに関して記した。

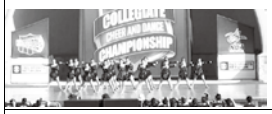
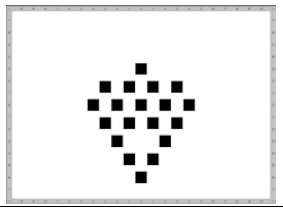
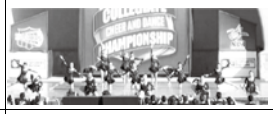
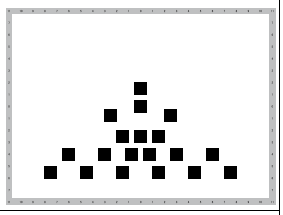
本稿では、海外大会編４本を、次稿では、国内大会編６本を掲載する。「VERITAS 作品 No.○○」は、国内外の大会作品を時系列でまとめた通し番号である。

（1）作品研究（海外大会編１）　VERITAS 作品 No.1

NCA & NDA COLLEGIATE CHEER AND DANCE CHAMPIONSHIP 2016
Dance Team Performance, Division Ⅲ
April 6-10, 2016
Peabody Auditorium & Bandshell, Daytona Beach, Florida
Results：Prelim 3rd Place, Final 1st Place, Innovative Choreography Award
（全米学生チアダンス選手権大会　ダンスチームパフォーマンス部門　Ⅲ）

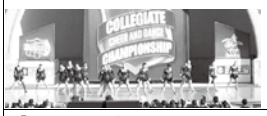


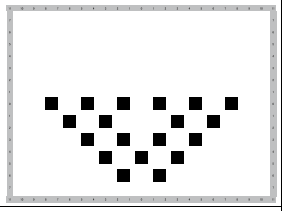
①　パフォーマンスとスコアシート分析

①	②
JAZZ Pharrell Williams 『Marilyn Monroe』  	JAZZ Pharrell Williams 『Marilyn Monroe』  
板付きのポーズはお城の門番を意味し、音源は３種類の効果音（シー・コツコツ・ギー）から始まる。王女がこっそりお城の扉を開けるシーンを表現している。その後バイオリンの音に合わせ体の面を素早く切り替えつつ、腕を振り回すように踊る。上半身を引きあげる動きが多く取り入れられている。	約 10 秒間でグループごとに足持ちターン・トゥタッチ・フロントジャンプなど７種類のテクニックが行われる。作品の序盤から一気にテクニックを取り入れることでそのレベルの高さをアピールする狙いがある。ダンスの振付ではジャズの特徴である、体の軸や、引き上げ、伸びやかさを強調したものになっている。

③

HIP HOP
Pitbull
『Celebrate』

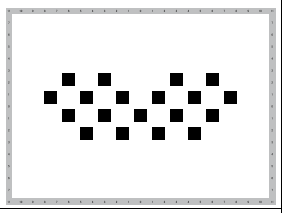




「different」の音源とともに、曲調が変わる。物語はお城から街へ飛び出す展開になる。後方のグループが、膝を曲げて大きく足を開き 4 つのポーズをとる。この 4 カウントがそれまでの優雅なイメージを壊し、迫力のある男性的な印象へとスイッチさせる。

④

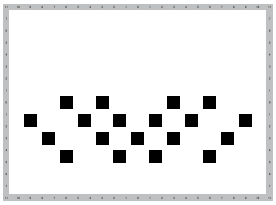
HIP HOP
Pitbull
『Celebrate』



個性的なポーズや、覆いかぶさるような動きが連続する。基本的に上半身を丸めて、膝をバネのように使うことで、ジャズセクションと動きの特徴に差をつける。ロックダンスの要素は、スピード感のある動きと止まりが特徴で、全体的にオンカウントが強調される振付の中でアクセントになっている。

⑤

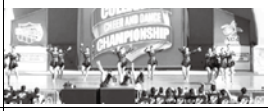
HIP HOP
Pitbull
『Celebrate』

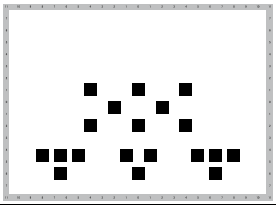


音源の「Playyayyayy」に合わせ、全員が体を大きく揺らしながら中央に集まる。この動きには見ている人の高揚感を高める狙いがある。その後両端のグループは滑り込むように横になり両足を回転させる。別のグループはCジャンプを行うなど高低差のある構成になっている。

⑥

POM
Ariana grande
『One Last Time』

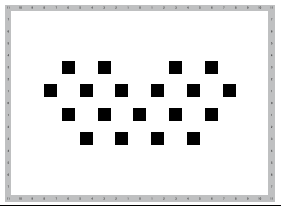




女性の爽やかな印象の曲に切り替わる。それと同時にハイブイやクラスプなど、代表的なアームの動きに変化する。溌剌とした表情と動きで王女が自分の夢を見つけるシーンを表現する。またグループに分かれセカンドやジュッテなどのジャンプが飛び交い軽やかな印象になっている。

⑦

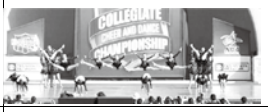
POM
Ariana grande
『One Last Time』

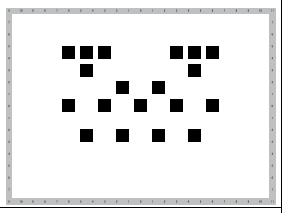


全員でフェッテターンを行う。その前のエルのロールオフは、体の軸を落ち着いて作り込むために取り入れられている。アームモーションを変化させながら回転していくことで、ポンセクションとしての演技が途切れないようにしている。強い目線で夢を見つけ突き進む決意をした王女を表現している。

⑧

POM
Ariana grande
『One Last Time』

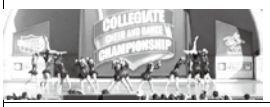


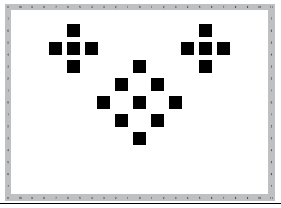


中央の 5 人がダイレクトトゥタッチを行う。4 人が 5 回、センターの 1 人は 7 回連続でジャンプしている。通常のダイレクトトゥタッチは 2 回～ 3 回が普通であるため、今回の作品のテクニックの中では最大の見せ場である。その他のグループではリフトやトリプルターンなどが取り入れられた。

⑨

JAZZ
Ariana Grande
『Break Free』

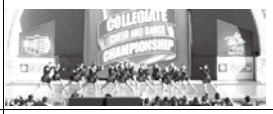


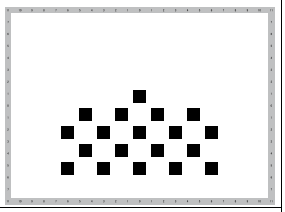


後方両サイドのリフトが中央に移動し、前方中央のグループが入れ替わるように広がる。規則的な動きが多いポンセクションからジャズセクションに変わり、開放感のある印象になっている。表情も晴れ晴れとした笑顔で、外の世界を堪能した王女がお城へ帰ってくるシーンを表現している。

⑩

JAZZ
Ariana grande
『Break Free』

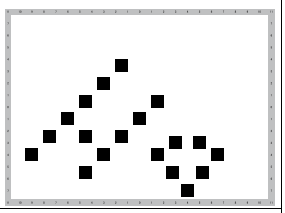




22 カウント動き続けていたフォーメーションが止まる。全員が足を固定し、中央に向かって腕を伸ばす。ステップをしないことで、ダンスをしているという印象が薄くなり、選手の感情を身ぶり手ぶりで表現しているように見せる狙いがある。大切なもの（夢）を見つけた王女の姿と重ねている。

⑪

JAZZ
Ariana grande
『Break Free』



最後は 2 種類の効果音（コツコツ・笑い声）で終わる。門番に囲まれた王女が笑うシーンを表現している。始まりと終わりに同じ足音が入っていることからストーリー性のある作品であることを感じさせている。笑い声に合わせて動くのは 2 人だけで、現キャプテンと次期キャプテンが人選されている。

※写真①－⑪： 筆者撮影の動画から静止画を作成。

スコアシート……SCORE

JAZZ	EXECUTION		
	予選	オープニングが魅力的で美しく、息をのむような動きが素晴らしい。スピードとビジュアルが美しく、ジャズのセクションで人の心を惹きつけている。	9.26
	決勝	息遣いが強くてパワフルかつ、音楽の解釈と表現が素晴らしい。膝をもっと使うとより安定した動きになりダンスが深みのあるものになる。	9.42
	CHOREOGRAPHY		
	予選	最初のミュージカリティが素晴らしく、音楽のビートの使い方がユニーク。グループワークがうまく使われていて、音楽のアクセントを良く捉え、表現できている。	8.88
	決勝	オープニングが驚くほど凝っていて、エンターテイメント性に溢れている。音楽の解釈と表現が素晴らしい。	9.32
POM	EXECUTION		
	予選	ポンの動きの強さとコントロールが安定している。位置間隔が正確である。もっと肩を落として演技すると良い。	8.84
	決勝	リープの時のポンのアームの位置が力強くて良い。よくコントロールできていて鍛錬されている。	9.38
	CHOREOGRAPHY		
	予選	ポンセクションの精度が高く、ユニークなビジュアルとアングルである。リフトの使い方がアクセントになっていて良い。 ポンの視覚的効果を高め、改良するために、アームモーションのバラエティが欲しい。	8.70
	決勝	とてもスマートで驚きのあるルーティーンになっている。	9.42
HIP HOP	EXECUTION		
	予選	ロックダンスの特徴である完全な静止が短く、不十分である。ステージングがとてもクリア。移動もダンス要素を取り入れて行うと良い。	8.78
	決勝	ロックダンスは今日の方が良く動けている。燃えるような情熱を感じ、スタイルが明確に表現されていて素晴らしい。	9.32
	CHOREOGRAPHY		
	予選	ミュージカリティが素晴らしく、曲の中の音をユニークな動きで捉えられている。	9.10
	決勝	大きく頭を動かすアイソレーションの動きが効果的。ロックダンスの振付が上手く取り入れられている。	9.30
TECHNICAL SKILLS			
	予選	フェッテターンのタイミングがもっと揃うと良い。“One last problem”のトゥタッチが正確で素晴らしい。	9.20
	決勝	フェッテターンの腕の形が揃うと良い。リープの時のアームの位置が力強くて良い。	9.34
VISUALS			
	予選	集団演技とバラエティに富んだテンポの振付により、優れたビジュアルとなり、舞台での存在感が生み出されている。	8.86
	決勝	ジャンルからジャンルへの切り替えがスムーズである。	9.26
STAGING			
	予選	演技を通してステージの取り方や角度の使い方が素晴らしい。素早い足の動きの時に体のポジションと姿勢をしっかり切り替えて移動を行うと良い。	9.26
	決勝	演技を通して位置間隔が良く、フロア全体が使えている。	9.58
UNIFORMITY			
	予選	正確で一体感があり、素晴らしい。	9.40
	決勝	楽しいグルーヴ感でヒップホップが揃っている。どのセクションでも安定感がある。	9.66

PERFORMANCE IMPRESSION			
	予選	ステージ上で衣装が可愛く見える。エネルギーがあり、とても発展的なチームスタイルである。	9.60
	決勝	とてもスマートで驚きがあり、エネルギーもスタイルも独特で新鮮。最初から最後まで記憶に残るルーティーンである。	9.66
COLLEGIATE IMAGE			
	予選	（「Sportsmanship」「Integrity」「School Representation」が評価の対象になっている。大学の部活ならではの仲間との絆の強さが、溌剌とした演技に繋がった。）	10.00
	決勝		10.00
TOTAL SCORE			
	予選	（初出場の大会の舞台に緊張し、動きが小さく収まった演技となった。）	9.157
	決勝	（決勝で初めてあがった屋外の舞台から見える景色に、選手一同が高揚し、これまでの中で一番良い演技となった。）	9.473

※SCORE SHEET：Competition Rule Book for Collegiate Teams, NCA & NDA Collegiate Cheer and Dance Championship 2016, p.33.

②　作品の構成と背景

【音源】

最初と最後に足音などの効果音を入れ、物語の始まりと終わりを表現している。規定上ストーリー性のある振付や構成が高く評価されるというような設定はないが、今回の作品は物語に沿って様々なシーンを表現している。音源の曲調の変化に合わせてジャズ→ヒップホップ→ポン→ジャズとセクションが切り替わっていく。セクションごとの違いをはっきりと分けて表現することが求められるため、曲調の変化は大きな役割を果たしている。例えばジャズセクションの音源はバイオリンの演奏で優雅で美しく上品な雰囲気があり、その直後のヒップホップセクションではクラブで流れるような盛り上がりを感じる曲に切り替わる。このように2分間の中で統一感のない曲調が入り混じり、その音楽に合わせた振付でバラエティに富んだダンスの表現が繰り広げられる。

【衣装】

厚みのある紫のベロア生地と黒のレース素材が使用されていて、シルバーのスパンコールが多く縫い付けられている。高級感のある印象で物語の主人公である王女のドレスをイメージした。

【振付】

音源に合わせて様々なリズムと動きが取り入れられている。オーソドックスな動きと、独創性のある動きが重なり合うように組み合わされている。全体を通してメロディが細分化されるように振付が生み出されているため、演技をする選手はどのように音楽が分割されているのか、どの部分で強弱がついているのかなど細かい指示を受け表現している。振付はポーズやその移り変わりを正確に実行するだけでなく、音楽やイメージに合わせた緩急のある表現や、物語やイメージに合った表情で踊ることが求められ、それも含めて振付になっている。

【物語】

主人公の王女の父は国王で、母は王妃。とっても優しい両親であったが、「危ないから」と言われ、王女は城の外に出してもらえなかった。

－ある日の朝－

「あの明るくて眩しい光は何？どうして木が揺れているの？あーっ、もう退屈！あれ？おうちの鍵がかかってないわ…わぁ、凄いっ！ここが外の世界なのね！」今がチャンス！！！そう感じた王女は城の外へ飛び出した。

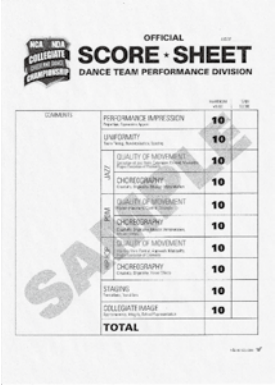
「たくさんの人がいるわ。私も行ってみよう！でもなんだか怖い…」

腕を誰かに掴まれた。「大丈夫？ここは危険だよ、僕と楽しいところに行こう！ついてきて！」誰かもわからない声に導かれ、たどり着いた場所には、見たことのない輝く景色が広がっていた。

「かっこいい！ここは、いったいどこ？すごく楽しい。こんなに楽しいのは初めて！」何もかもがキラキラ輝いて見え、王女は気持ちが高揚した。

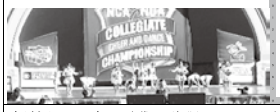
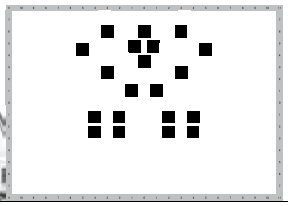
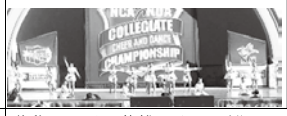
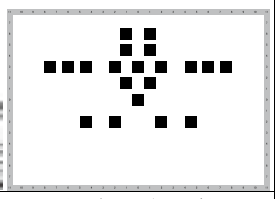
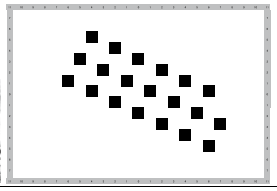
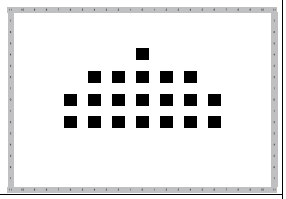
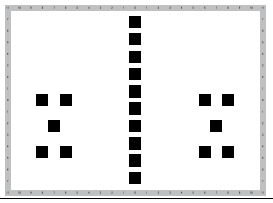
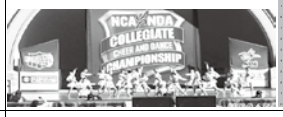
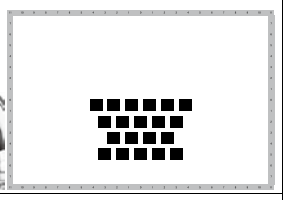
「外は私の知らない世界ばかり、本当に最高の１日。」昨日までは知ることもなかったこの世界。新しい世界を知った王女は、人との出会い、新しい文化に触れ、やがて自分の夢を見出していく。夢を見つけた王女は城へ戻っていく。 城には変わらぬ景色と、いつもの門番。その中で王女は笑みを浮かべる。

（2）作品研究（海外大会編２）　VERITAS作品No.3



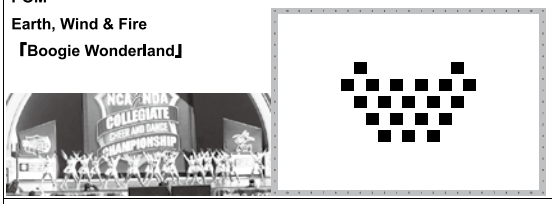
NCA & NDA COLLEGIATE CHEER AND DANCE CHAMPIONSHIP 2017
Dance Team Performance, Division Ⅲ
April 5-9, 2017
Peabody Auditorium & Bandshell, Daytona Beach, Florida
Results：Prelim 2nd Place, Final 1st Place
（全米学生チアダンス選手権大会　ダンスチームパフォーマンス部門　Ⅲ）

①　パフォーマンスとスコアシート分析

① JAZZ Earth, Wind & Fire 『Boogie Wonderland』   板付きは、赤い手袋を強調するポーズで個性的な印象を与えている。踊り出しは４組のスポット付きトゥタッチとセンターのリフトから始まる。イントロの強い音源に合わせて高さを強調する振付になっている。グループに分かれた構成から、中央に向かって集まる動きで一体感を演出している。	② JAZZ Earth, Wind & Fire 『Boogie Wonderland』   移動しながら、複雑なグループ分けがされており、次々にジャンプやターンのテクニックが行われる。「Dance」や「Boogie Wonderland」の音源に合わせ全体のビジュアルが変化する。伸びやかなイメージではなく、選手の長所である体のバネをいかした力強くシャープな振付になっている。
③ HIP HOP Earth, Wind & Fire 『Boogie Wonderland』  音源が男性の声に変化し、ヒップホップセクションに切り替わる。振付は膝や肘を曲げる動きが多く取り入れられている。ジャズセクションの引っ張るような体の使い方から一気に変化させることで、それぞれの特徴を明確に表現している。列ごとに高低差をつけた動きでシンプルな構成になっている。	④ HIP HOP Earth, Wind & Fire 『Boogie Wonderland』  斜めのフォーメーションから全員がランニングマンのステップで移動する。移動と踊りを明確に分けるのではなく、踊りながらフォーメーションを変化させる。歌詞に合わせて、16 ビート・8 ビート・スロー・ヒットなど、様々なリズムが取り入れられており、音楽と同調している。
⑤ HIP HOP Earth, Wind & Fire 『Boogie Wonderland』  中央の縦一列は千手観音の様なアームの動きをしたあとで、前方７名が左右に開き、後方３名が前に出てくる移動が行われる。このフォーメーションの変化は奥行きを感じる構成になっており、かき分けるように突き進むイメージを表現している。	⑥ HIP HOP Earth, Wind & Fire 『Boogie Wonderland』   広がっていたフォーメーションから、全員が外足を跳ねるようにして中央に集まる。オーソドックスな動きだけでなく、独自性のある動きを入れることで、違和感を与え印象に残る場面にしている。密になったフォーメーションで体を左右に大きく振る群舞により一体感を感じる構成になっている。

⑦

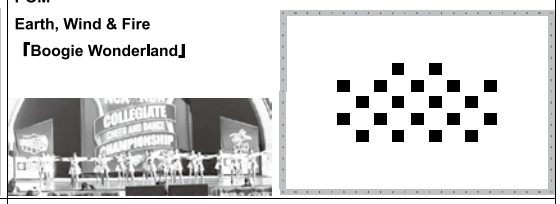
POM
Earth, Wind & Fire
『Boogie Wonderland』



音源の曲調が変化し、ポンセクションへ切り替わる。左右対称のフォーメーションでハイブイやクラスプなどのオーソドックスなアームモーションが続く。内側から外側へ腕や体を開いて行うアームモーションが多く取り入れられており、小柄な選手の体を大きく見せる狙いがある。

⑧

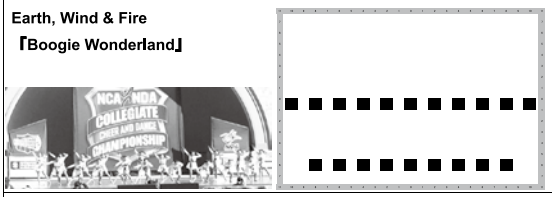
POM
Earth, Wind & Fire
『Boogie Wonderland』



間隔を十分にとったフォーメーションで、全員がフェッテターンを回る。一人一人のスペースを広く確保し、選手の安心感につなげている。ポンセクションの中で約 8 秒間フェッテターンを行っているため、アームモーションを行いながら回転し、ポンの表現を切らさないようにしている。

⑨

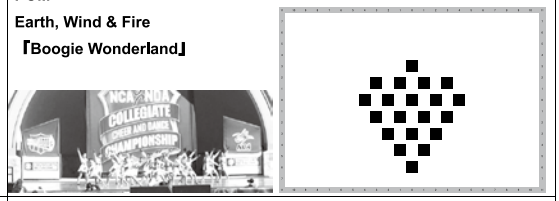
POM
Earth, Wind & Fire
『Boogie Wonderland』



横 2 列のフォーメーションへ 4 歩で移動をする。複雑なステップではなく歩きながら移動し、手の指で「3･2･1」と上に突き上げるように表現する。この動きは優勝へのカウントダウンを意味し、選手の目標である優勝への強い想いを伝える狙いがある。

⑩

POM
Earth, Wind & Fire
『Boogie Wonderland』



横に広がったフォーメーションから、前傾になるポニーステップで中央に集まる。体を前に傾けることで風を切って進むようなイメージになっている。8 カウントで更にフォーメーションを変化させ激しく動き、最後のポーズは一気に時が止まったようなイメージで体全体を静止させる。

※写真①－⑩：筆者撮影の動画から静止画を作成。

スコアシート……SCORE

PERFORMANCE IMPRESSION			
	予選	勢いが素晴らしい。全体を通して、視覚的に良い構成、親しみやすい振付である。	8.83
	決勝	予選より良くなった。セクションごとのカラーが素晴らしい。自信を持った大胆な部分と、バランスを取るべき部分がどちらも優れている。ダンサー達のチームでの一貫性を感じる。	9.30
UNIFORMITY			
	予選	ユニットごとのロールの動きが格別に揃っている。	8.93
	決勝	全員が同じレベルであるのが良く、効果的に見せられている。素晴らしい精密さである。	9.28
JAZZ	QUALITY OF MOVEMENT		
	予選	オープニングの体のコントロールが良い。移動中もジャズの踊り方の統一性を保つと良い。	8.70
	決勝	体がコントロールされ、振付がより視覚的に映えるような動きである。	9.23
	CHOREOGRAPHY		
	予選	イントロ部分のオープニングがとてもワクワクする。	8.58
	決勝	相反する要素（ジャズの要素と、音楽のビートとエネルギー）の使い方が素晴らしい。	9.18
POM	QUALITY OF MOVEMENT		
	予選	移動の間のアームモーションを正確にコントロールすると良い。ポンの動きの質を力強く行うことでスタイリッシュにみえる。Tモーションのときに、正しいタイミングで止め、肘を伸ばし切ると良い。アラセゴンドのプレパレーションのターンアウトが良い。	8.60
	決勝	アームのコントロール、正確さと強さが素晴らしい。フェッテターンの動きが全員よくコントロールできている。	9.10

	CHOREOGRAPHY		
	予選	ポンパートでの隊形移動のスケール感が効果的である。メンバーのレベルにあった隊形の配置がされている。迫力のあるミュージカリティが良い。	8.50
	決勝	速度が一定化してしまうため、さらに強く、ダイナミックな効果を加え、テンポの違いをつけると良い。	8.75
HIP HOP	QUALITY OF MOVEMENT		
	予選	体をとてもよく使えている。	8.38
	決勝	ヒップホップの要素をさらに取り入れたリズムを、継続して行うと良い。隊形が正しい場所に行けているかを確認すると良い。	8.60
	CHOREOGRAPHY		
	予選	印象的な隊形移動が素晴らしい。	8.35
	決勝	ロックダンスの要素が視覚的効果を高め、破壊力のある印象になっていて良い。ほぼ最高の、視覚的な構成である。	8.55
STAGING			
	予選	終始続く精密な隊形が良い。ユニークな隊形と移動が、強く良いビジュアルである。ステージ全体を使った構成が素晴らしく、振付をさらによく見せられている。	9.08
	決勝	フロアの使い方がとてもスムーズで、見ていてワクワクした。	9.28
COLLEGIATE IMAGE			
	予選	（「Sportsmanship」「Integrity」「School Representation」が評価の対象になっている。目標に対しての意志の強さが、演技の爆発力に繋がった。大学生ならではのエネルギー溢れる作品となった。）	10.00
	決勝		10.00
TOTAL SCORE			
	予選	（2年目のプレッシャーや不安を選手それぞれが抱え、委縮した演技となった。）	8.795
	決勝	（全員で目標を再確認し決勝に挑んだ。予選後の練習で振付を変更。予選での課題を改善し演技した。）	9.125

※SCORE SHEET：Competition Rule Book for Collegiate Teams, NCA & NDA Collegiate Cheer and Dance Championship 2017, p.31.

②　作品の構成と背景

【音源】

通常のチームパフォーマンス部門の音源は、ジャズ・ヒップホップ・ポンのセクションごとに雰囲気の異なる表現が求められることから、複数の音楽が組み合わされていることが多い。しかし、今回の作品は1曲のみを使用して音源が作成され、1曲の中での曲調の変化を、セクションの切り替えのタイミングとした。同じ曲であることから、最初から最後までリズムの速さも一定であり、単調な仕上がりになりやすいため振付やフォーメーションの変化の仕方に工夫をする必要があった。

【衣装】

決勝の舞台で太陽に照らされたときに明るく浮かび上がって見えるように、白が基調の明るい色味の衣装になっている。アメリカの大会であることから、逆に日本人であることを強調した衣装（和柄）にし、日本人ならではの見た目と作品づくりに力をいれた。

【髪型】

小柄な選手が多かったため髪型はツインの高いお団子にし、スラッとした印象ではなく、小柄だが俊敏でパワフルな印象をつくりだした。

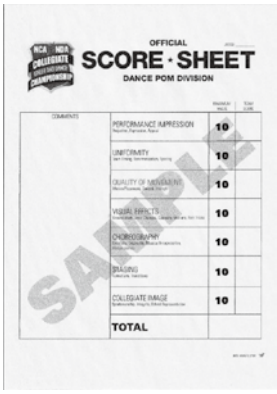
【振付】

次々にセンターの選手が入れ替わるような構成になっており、平面的な見た目ではなく、常に立体的に見える構成になっている。個々の身体能力が高く、個人のアピール力が高いアメリカの

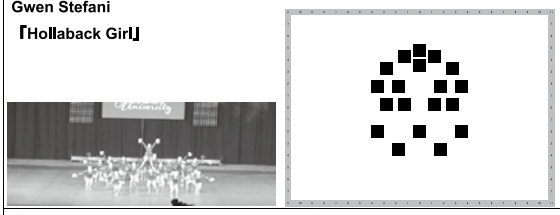
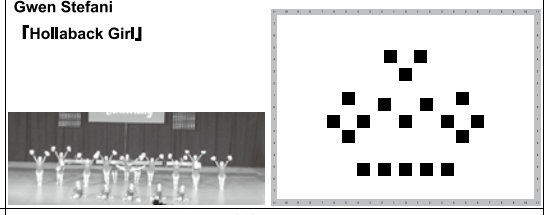
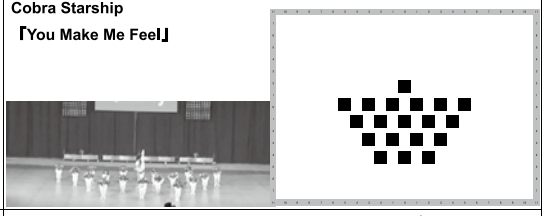
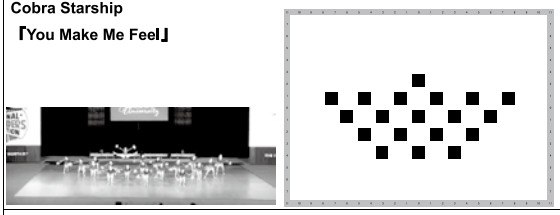
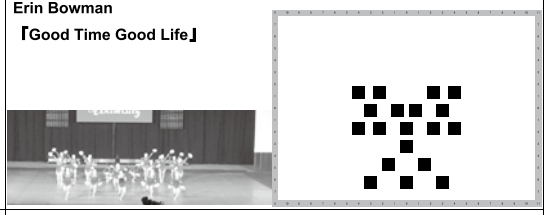
選手に対抗するため、あらゆるダンスを全員で見せていくことを意識して作られている。

（3）作品研究（海外大会編3）　VERITAS作品No.5

NCA & NDA COLLEGIATE CHEER AND DANCE CHAMPIONSHIP 2018
Pom, Division Ⅱ
April 4-7, 2018
Peabody Auditorium & Ocean Center, Daytona Beach, Florida
Results：Prelim 1st Place, Final 1st Place, Innovative Choreography Award
（全米学生チアダンス選手権大会　ダンスポン部門Ⅱ）

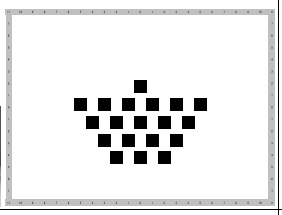


①　パフォーマンスとスコアシート分析

① Gwen Stefani 『Hollaback Girl』  音源のスタートと共にトリプルターンから演技が始まる。その着地に合わせ全体が外に開くアームモーションで止まる。スピードのあるターンから一気に静止することで、メリハリのある振付になっている。コンパクトなフォーメーションから踊りながら広がっていく構成になっている。	② Gwen Stefani 『Hollaback Girl』  足持ちターン・面を切り替える連続トゥタッチ・バックルなどテクニックを連続して行う。演技の序盤は呼吸が安定していて疲れがないため、特に多くのテクニックが詰め込まれている。また、テクニックを行うタイミングはグループごとに完全にずらし、それぞれをクリアに見せている。
③ Gwen Stefani 『Hollaback Girl』 3列になり2列目のグループがそれぞれ女性らしいポーズを決める。異なるポーズをキープし音源の「Hollaback Girl」に合わせてリズムをとる。1列目は床に手をつく低い姿勢で踊り、2列目と3列目も高低差をつけた振付で各グループの動きをクリアに見せている。	④ Cobra Starship 『You Make Me Feel』  ソロのスコーピオンはセンターで突き出るように足をあげ、他の選手は低い姿勢で止まる。その後全員で行う素早いエルモーションのロールオフにより、スポットのテクニックが波に飲み込まれているようなイメージになっている。個人の表現からチームの表現に素早く切り替わっている。
⑤ Cobra Starship 『You Make Me Feel』  移動は重心を真下に落とすような動きになっており、落ち着いて軸をつくり込む狙いがある。間隔を十分にとったフォーメーションで、全員がフェッテターンを回る。一人一人のスペースを広く確保し、選手の安心感につなげている。	⑥ Erin Bowman 『Good Time Good Life』  前方6名は長くフェッテターンを回り、回転を止めずにそのままシェネジュッテを行っている。ジャンプは一番高くなる部分で上半身を上に向けることでより高く見せている。ジャンプの着地と後方グループのタッチダウンとエルモーションの動きが合わさり飛び出すような構成になっている。

⑦

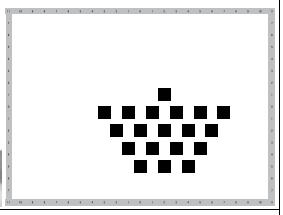
Erin Bowman
『Good Time Good Life』



ヒップホップのような踊りに切り替わる。膝を使い、上半身を丸めて動くことで雰囲気が一変する。体の動きの幅を大きくし、アームは止めるだけでなく、沈むように動くことでこれまでと違ったリズムをつくりだしている。別ジャンルのダンスを突如入れ込むことでアクセントになっている。

⑧

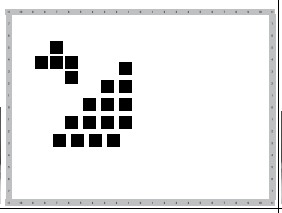
Lady GaGa
「The Edge Of Glory」



フォーメーションは形状をキープしたまま左右を往来する。作品の中盤となり呼吸を整えるため、振付を盛り込み過ぎないようロールオフを多く取り入れている。音源の「alright」に合わせて膝を曲げながらクラスプをするポーズは、可愛らしい印象にするため顔の角度が上向きになっている。

⑨

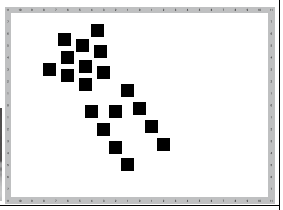
Little Mix
『Salute』



ステップをしながらフォーメーションを大きく下手に移動させる。可愛いらしいポーズから一気に横幅を意識した迫力のあるステップになることで、ギャップをつくりだしている。斜めに向かって踊るユニークなフォーメーションで、魚の群れのように見せている。

⑩

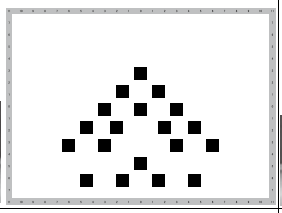
Little Mix
「Salute」



通路をつくるように、4 名ずつが斜めに並ぶ。逆立ちをして足をたたくテクニックから、ソロの片手前方転回、後方メンバーのダブルターンとテクニックが続き、音楽のリズムと共に全員が同じタイミングで完全に止まる。この止まりは、選手を精神的に落ち着かせる狙いもある。

⑪

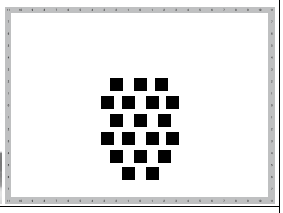
Britney Spears
『Ooh La La』



ポニーステップで中央へスピード感のある移動を行う。シェネトゥタッチ・トリプルターン・レッグホールド・エルターンが盛り込まれ演技後半のテクニックの見せ場となる。フォーメーションは、通常の間隔と比べ 1.5 倍の広さがあり、伸び伸び動けるようになっている。

⑫

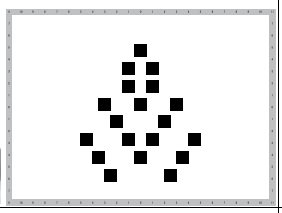
Christina Aguilera
「Show Me How You Burlesque」



両手に持っているポンポンを左手に持ち背中に隠して踊る。ポンカテゴリーでありながら、その最大の特徴であるポンポンを封印するように踊ることで独創性の高さをアピールしている。右手だけで踊る 8 カウントのダンスは、手のひらの表現も使うジャズのような振付になっている。

⑬

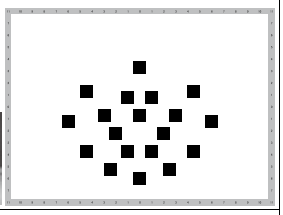
Christina Aguilera
「Show Me How You Burlesque」



ポンポンを素早く両手に持ち、跳ねるような動きがグループごとに取り入れられている。チアリーディングのダンスパートをイメージし最後の盛り上がりをつくりだしている。止めを意識しすぎない振付で、自由さを感じられる印象となっている。

⑭

Christina Aguilera
「Show Me How You Burlesque」



フォーメーションの外側の 10 名が円を回るようにジャンプする。ジャンプが一番高くなるタイミングで音源に効果音（バーン）が入っており、それと同時に中央のグループがポンポンを思いきり上に投げることで、キャノン砲のような演出になっている。

※写真①－⑭：筆者撮影の動画から静止画を作成。

スコアシート……SCORE

PERFORMANCE IMPRESSION			
	予選	スタイル、技術が発揮されていて、ポーズ・チームワーク・タイミング、どれも素晴らしい。一つになって踊っている彼女達を称えたい。	9.82
	決勝	ビジュアルを作り出すレベルと熱意が素晴らしい。心からの表現とパフォーマンスを行っていて、見ていてとても楽しい。最初から最後まで驚くべき強烈なアタックと、素晴らしいコントロールがなされている。このチームは並外れたステージでの存在感と自信がある。ステージをすさまじく支配している。	9.96
UNIFORMITY			
	予選	頭の位置や体の向きまでとても細かに統一された、非常に才能あるチームである。体の向きを揃えられるとさらに良い。	9.58
	決勝	演技全体を通して、格別に揃っている。	9.66
QUALITY OF MOVEMENT			
	予選	オープニングのトゥタッチを始め、テクニックのコントロールが良い。動きの位置と同様に、技の強さの統一を目指すと良い。常に振付に忠実に、止まるところはしっかり止まると良い。フェッテターンの回転が増えても後方の右足を伸ばし、脚を落とさないようにすると良い。	9.56
	決勝	連鎖でジャンプをするとき体の右側を前に引っ張り、脚はお尻からターンアウトすると良い。グループでジャンプをするとき爪先まで完全に伸ばすと良い。	9.80
VISUAL EFFECTS			
	予選	オープニングがダイナミックで、精密さが優れている。	9.50
	決勝	オープニングのビジュアルが素晴らしい。	9.76
CHOREOGRAPHY			
	予選	ミュージカリティが素晴らしい。全体的に色々なスタイルが組み込まれているが、下半身の振付をダンサーに挑戦させると良い。見ていてとても楽しい演出であり、終盤の花火のようなエンディングが独創的で素晴らしい。	9.60
	決勝	忙しすぎず、ちょうど良い量の技術的な動きや移動のバラエティを含んだ途切れることのない振付がされている。	9.54
STAGING			
	予選	ステージを最大限に使っている。技の終わりの隊形を維持し、センターからの移動や隊形が分かれる時を明確にすると良い。	9.42
	決勝	フェッテターン後の一連の動作の位置を定めると良い。とてもスムーズな隊形移動である。特にテクニックをするグループが空間を保てるようフロアを横切る滑らかな移動が好き。足の母指球を使った移動をすると良い。	9.58
COLLEGIATE IMAGE			
	予選	（「Sportsmanship」「Integrity」「School Representation」が評価の対象になっている。基礎に忠実な動きと、個性的な表現が融合したチームのカラーをアピールした。）	10.00
	決勝		10.00
TOTAL SCORE			
	予選	（予選から会場を巻き込む演技となり、大歓声に包まれた。）	9.64
	決勝	（会場中を味方につけた演技。表彰後のバックヤードでは出場選手全員からの拍手と祝福の声が送られた。）	9.757

※SCORE SHEET：Competition Rule Book for Collegiate Teams, NCA & NDA Collegiate Cheer and Dance Championship 2018, p.62.

②　作品の構成と背景

【部門】

VERITASとしては、3年目のNDA大会となったが、これまでとは部門が異なり、初めてポン部門で出場することになった。まずは規定を細かくチェックするところから始まり、アメリカチームの動画を見て研究を行った。どの様に評価をされるのか、ライバルチームの存在も情報が少なかったが、これまでチームパフォーマンス部門で2連覇してきた経験から、チームの個性を表

現しながら完成度の高い演技に仕上げていくことを目標とした。ポン部門の演技をつくりこむ中で一番に意識したのは、ブレない上半身だった。お腹を丸める動きや肩を使う動きなどをほとんど無くしクリアな見た目に拘った。一人一人の癖を指摘しながらチームで統一した動きや表現をつくりこんだ。

【衣装】

伸縮性のある水着素材のチアユニフォームで、ワッペンや刺繍、生地の縫い合わせにより柄が入っているのではなく、全面昇華プリントになっている。そのため軽くて踊りやすい衣装となっている。色味は紫と黒とグレーを基調としている。胸にはチーム名の「VERITAS」が入っている。

【振付】

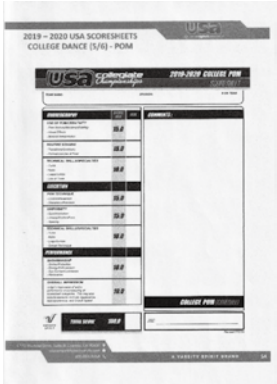
ポンの最大の特徴であるアームモーションの動きに、突如ヒップホップのような振付や、ジャズのような振付が入り込むのが特徴である。チームパフォーマンス部門で培ってきたセクションの切り替えのような変化を取り入れることで、様々なジャンルのダンスを踊りこなすような特別感のある構成になっている。しかし、あくまでポン部門の作品となるため、そのような場面は8カウント程演じ、すぐにアームモーションを中心とした構成に戻るようになっていて、バランスを意識して取り入れられている。

【戦略】

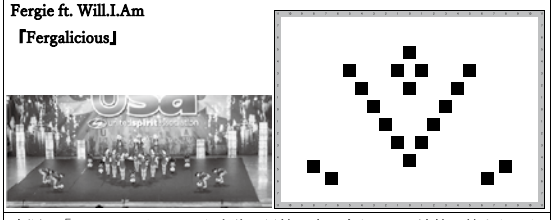
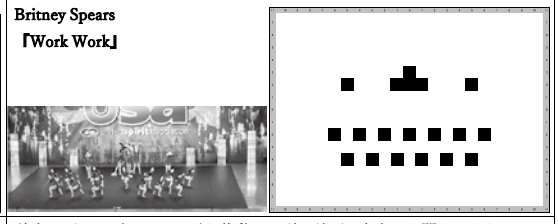
これまでのNDA大会出場の際は、予選で緊張し、演技が収まった印象になることが多かった。そのため予選結果は1位には届かなかったが、決勝で逆転している。決勝での勝因として、観客を巻き込む演技ができたことがあげられ、会場全体が湧くようなエンターテイメント性に富んだ作品と演技にすることを意識し、予選から1位を獲得することを狙った。

（4）作品研究（海外大会編4）　VERITAS作品No.10

USA COLLEGIATE CHAMPIONSHIPS 2020
Pom 4 Year College
February 15-16, 2020
Anaheim Convention Center, Anaheim, California
Results：Prelim 1st Place, Final 1st Place
（USA全米大学選手権大会　4年制大学ポン部門）

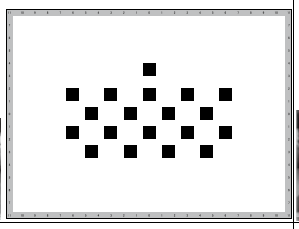


①　パフォーマンスとスコアシート分析

①	②
Fergie ft. Will.I.Am 『Fergalicious』 	Britney Spears 『Work Work』 
音源の「VERITAS！」という力強い男性の声に合わせて、演技の始まりからフォーメーションが大きく変化する。その後５カウントで２トップのフォーメーションになり、トゥタッチ、足持ちターン、後ろ脚のキープなど続けてテクニックを見せていく構成になっている。	前方のグループはスムーズな移動で２列に並び、中央から開くようなアームの動きでロールオフを行う。その間で後方のグループは、リフトの準備のためポジションにつき４カウント静止しているが、前方の動きが激しいため目立たなくなっている。

③

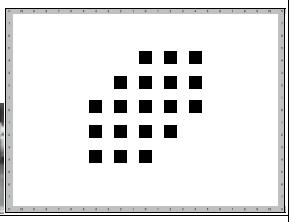
Britney Spears
『Work Work』



フェッテターンが１回転で終わり、その後すぐに斜め向きのトリプルターンに切り替わる。フェッテターンは通常連続して回転するテクニックなので、見ている人が予測しない流れになっている。着地は前傾のハイブイで、目線を正面にしている。着地の形まで意外性のあるテクニックになっている。

④

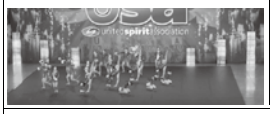
Britney Spears
『Work Work』

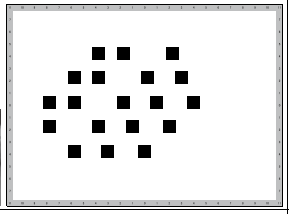


左右対称のフォーメーションが続いたが、斜めを強調する形に変化させる。このような変化でアクセントをつくり飽きさせない構成になっている。ロールオフからの後列のジャンプは、それ自体が一つのテクニックであるかのようにつなげて見せた。

⑤

Britney Spears
『Do Somethin'』

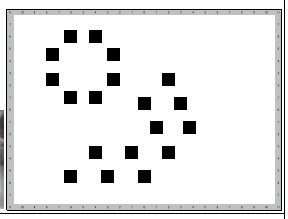




４つのグループに分かれて踊る構成になっている。人数差により迫力の違いが出ないよう、少人数の振付ほど体を大きく開く動きが取り入れられている。上半身の固定はせずに、胸や肩を使って形の止まりではなく、動きや、リズムの取り方などを強調して見せている。

⑥

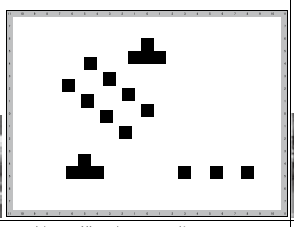
Britney Spears
『Do Somethin'』



曲線と直線が混ざり合っている複雑なフォーメーションで、下手後方のグループが円を描くようにシャネをする。その後素早く斜めの２列に変化し、前方のグループも踊りながら移動をしていく。音源の「Do somethin'」に合わせた振付がアクセントになっている。

⑦

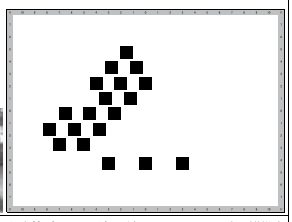
Britney Spears
『Do Somethin'』



全員が正面に向かって踊るのではなく、斜めや横に向かって動いているグループもあるため、四方に向けてパフォーマンスをしているような広がりを感じさせる。リフトは体が上がりきった所で上半身を思いきり倒し、足を回しながら向きを変えている。

⑧

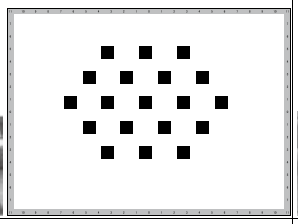
Hyper Crush
『Ayo』



前方の３人の動きと連動するように下手後方の３列に並んだグループが間隔をキープしたまま中央へ移動する。移動時の踊り方としてはその後のフェッテターンに安定して入れるよう、上半身を固定し軸をつくりこんだ。頭の高さが上下に揺れないように歩くことで安定感のある移動になっている。

⑨

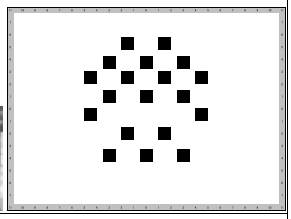
Hyper Crush
『Ayo』



フェッテターンは人が加わっていき迫力が増していくように見える構成になっている。プリエとアップの形を明確に見せるようにアクセントがついている。足を真横に開いた時体の面が正面を向き、足の高さが腰の位置に統一されているためクリアな見た目になっている。

⑩

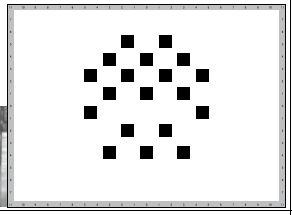
Hyper Crush
『Ayo』



全員が同じタイミングでポーズを決めて４カウント止まったままキープする。激しかった動きがピタッと止まるため、動画が一時停止したかのような演出になっている。

⑪

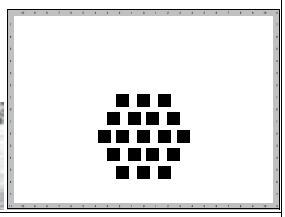
Britney Spears
『Toxic』



キープしていたポーズから解放されるように、全員が柔らかくしなやかに動きだす。アームモーションではなく、ポンポンがゆっくりなめらかに動くような振付になっている。膝を内側に曲げていく動きなどが取り入れられ、雰囲気を作り出している。

⑫

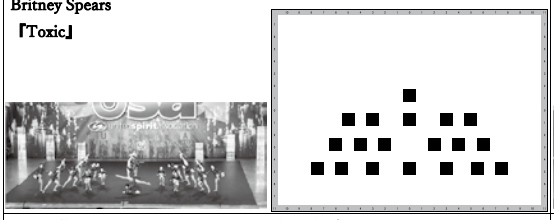
Britney Spears
『Toxic』



腰を振るように歩きながらポンポンをくねくねと動かし、前方に全員が勢いよく集まる。女性らしいキュートな動きと表情で可愛らしさを思いきり表現する。全員が前傾になる動きでは、ユニークな表情とタイミングの揃った群舞によりインパクトのある場面として、作品のアクセントになっている。

⑬

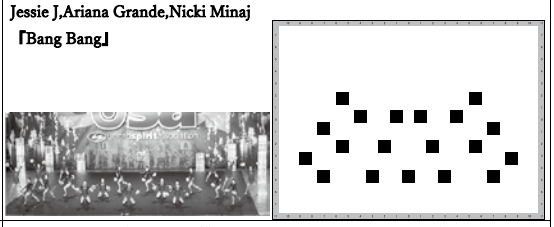
Britney Spears
『Toxic』



中央に集まったフォーメーションを一気に広げる。フェッテターンやトゥタッチなど横に足を伸ばすテクニックが取り入れられており、伸び伸びとした爽やかな印象になっている。

⑭

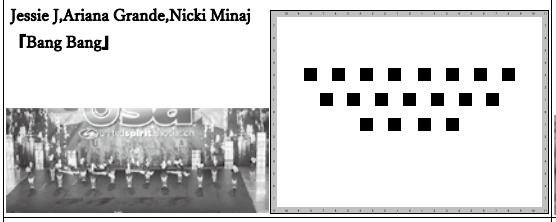
Jessie J,Ariana Grande,Nicki Minaj
『Bang Bang』



グループごとで動いていた構成から、一つにまとめるように全員が同じタイミングで止まる。移動は高低差を大きくみせることで生き生きとした印象になっている。ユニゾンで体を思いきり下に落とす動きの時に全員で「ハッ！」と声を出している。息を吐き呼吸を整える狙いがある。

⑮

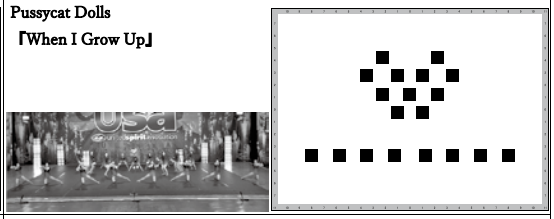
Jessie J,Ariana Grande,Nicki Minaj
『Bang Bang』



全員でジャンプのプレパレーションのような動きをするが、前列の４人のみがジャンプをするという意外性のある構成になっている。その後、３列目と１列目のグループが２列目の７人の間をすり抜けて交差する移動が、２カウントの間で行われる。

⑯

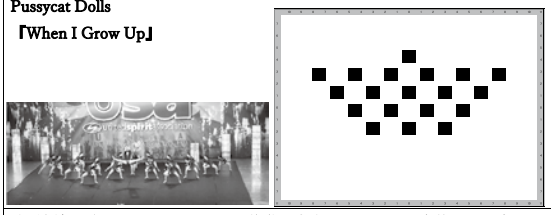
Pussycat Dolls
『When I Grow Up』



前列の８名が下手から上手に向かって一人ずつ片手側転を行う。目一杯広がったフォーメーションで行うことで、ダイナミックな印象になっている。後方のグループは、胸や肩、ステップなどでリズムを大きくとることで、迫力のある曲と動きをマッチさせている。

⑰

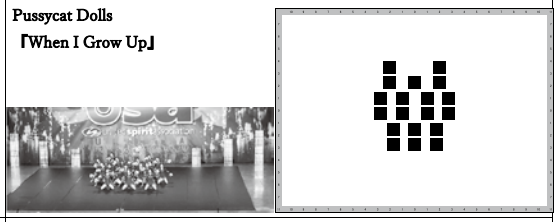
Pussycat Dolls
『When I Grow Up』



片手側転を行っていたグループが移動し中央のグループに合体する。広がってからすぐに集まるフォーメーションの移動で、全体の見た目を短時間で大きく変化させている。集まったと同時にセンターでソロのトゥタッチが行われ、その着地と同時にその他の選手が波紋をイメージした動きをしている。

⑱

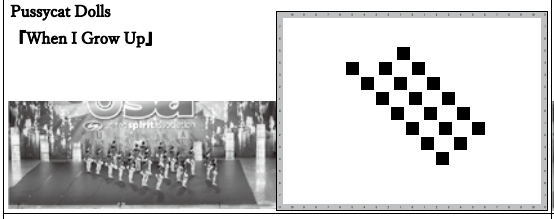
Pussycat Dolls
『When I Grow Up』



小さくユニークなフォーメーションが特徴。移動後は、可愛らしいポーズをスローテンポでとっていき、その後の素早い動きとの急激なスピードの変化をつくりだしている。振付は高低差を意識し、飛び出すような踊り方にすることで観客をびっくりさせる狙いがある。

⑲

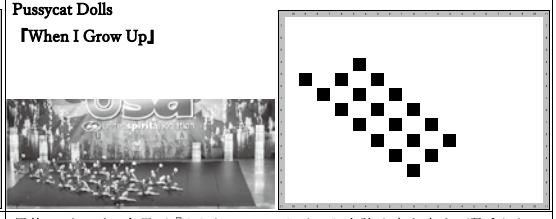
Pussycat Dolls
『When I Grow Up』



斜め３列への移動は、マスゲームのようにフォーメーションが変化していく。ジャンプは上手から下手に向かって大きく移動しながら行う。一歩一歩の足幅と、ジャンプの頂点や転がりの幅を統一することで、最後まで丁寧な印象を与え完成度の高い作品であることをアピールしている。

⑳

Pussycat Dolls
『When I Grow Up』



最後のポーズは全員が『GO！VERITAS ！』と力強く声を出す。選手たちの生の声により作品が締めくくられることで、思わず拍手を送りたくなるような演出になっている。声のトーンやアクセントまで揃えることで、チームの一体感と気迫を伝えている。

※写真①－⑳：筆者撮影の動画から静止画を作成。

スコアシート……SCORE

CHOREOGRAPHY			
USE OF POM / CREATIVITY			
	予選	オープニングがダイナミックで素晴らしい。レベルとダンスの多様性が、動きの中で最初から最後まで見て取れる。ポンモーションの高低差の使用が素晴らしく、きれいなリフトが視覚的効果を高めている。テクニックが同じにみえないよう、変化をつけると良い。	14.5
	決勝	ミュージカリティが高く、静止部分の見栄えが良い。音楽のあらゆる部分を活用した細部へのこだわりを感じる。スムーズな隊形移動の中に、効果的なアームモーションを取り入れると良い。	14.7
ROUTINE STAGING			
	予選	創造的なバラエティーフォーメーションとフロアパターンである。移動は綺麗で速いが、もっと工夫すると良い。	14.0
	決勝	素晴らしい見せ方と、とても良いステージの使い方と移動がされている。フォーメーションのバリエーションと空間の使い方が効果的であり、クリアな移り変わりができている。	14.0
TECHNICAL SKILLS / SPECIALITIES			
	予選	ミュージカリティの高い動きがメンバーのレベルに合っていて素晴らしい。テクニカルスキルがよくまとめられているが、反復的なスキルは注意すると良い。	9.0
	決勝	良い難易度で構成されている。	9.2
EXECUTION			
POM TECHNIQUE			
	予選	強い動きや一体感が素晴らしく、とてもダイナミックに動けている。演技後半のアームモーションを強くすると良い。	14.2
	決勝	切り替え、ジャンルの変化の移り変わりと見せ方が素晴らしい。動きの緩急がとても好ましい。驚くほど、アームのコントロールと力強さが良い。	14.8
UNIFORMITY			
	予選	フォーメーションへの移動がとても正確。小さな動きにも注意していて素晴らしい。	13.9
	決勝	揃った動きと各々の特技の見せ方が素晴らしい。移動がシンプルですっきりしている。	14.8
TECHNICAL SKILLS / SPECIALITIES			
	予選	オープニングのトゥタッチの高さが素晴らしい。全体的にテクニックへの素晴らしいチャレンジで、最初から最後まで個人の特技が使われている。ターンでの傾きを避けると良い。ジュッテジャンプの時、つま先をポイントにすると良い。	8.7
	決勝	ジャンパーがとてもダイナミックである。種類に富んだ多様なテクニックへの挑戦が素晴らしく、とても綺麗で正確である。演技を通して、テクニックの動きが強い。	8.8
PERFORMANCE			
SHOWMANSHIP			
	予選	笑顔とエネルギーが伝わり、見ていてとても楽しい。	9.6
	決勝	あなたたちの笑顔とエネルギーはみんなを笑顔にさせる力がある。素晴らしい演技でとても面白かった。	9.8
OVERALL IMPRESSION			
	予選	精密さには非の打ち所がない。エネルギーはよいがそれぞれの引き締めを注意すると良い。	9.8
	決勝	演技を通して、見栄えと見せ方がとても素晴らしい。あなたのチームの動きが揃う瞬間は本当にすごい強みである。チームの持っている正確さ（安定感）は素晴らしく、落ち着きもありながら、力強さと存在感が満載の演技である。	9.8

TOTAL SCORE			
	予選	（十分な準備がされた演技で、練習と変わらない落ち着いたパフォーマンスが披露できた。）	93.70
	決勝	（一つ一つの動きを正確に行い、チーム史上最も完成度の高い演技となった。）	95.90
	総合得点	※総合得点の算出方法：予選30％、決勝70％の点数の合算。総合得点が最終順位に反映される。	95.24

※SCORE SHEET：2019-2020 USA Collegiate Championships, Scoresheets College Dance（5/6）POM, p.54.

②　作品の構成と背景

【部門】

VERITASとして5度目のアメリカ遠征となった今回、初めて出場する大会であった。大会についての情報収集から始まり、演技をするフロアや会場の様子を掴むことなど、事前準備を徹底して行った。チームの基礎的な動きを揃えるところから始め、踊り方の統一を図った。初出場、初優勝を目標とし、確実なテクニックと、メリハリのある振付を解釈し表現することを細部まで拘り、作品の完成度を高めていった。

【衣装】

今回着用したチアユニフォームには、前回のアメリカ大会から、少しの改良が加えられている。腰部分にゴムを入れ、日本人の体型に合わせ腰の位置が下がったことで、より安定感があり踊りやすい衣装となった。

【振付】

全体を通して、スムーズにフォーメーションが変化し常に途切れることのない構成になっている。移動は腰を落とすようにして歩き、頭の位置が上下に跳ねることのないように動くため、安定感のある印象を与えている。アームモーションはスピード感のある動きの組み合わせの後には、完全な止まりを見せるようなメリハリのある振付が多く取り入れられた。また、テクニックは難易度の高いものを盛り込むのではなく、オーソドックスなものが多く取り入れられている。その表現の仕方に細かい指示がなされ、構成上それぞれがより印象的に見えるように演出された。完成度と表現力を徹底的に高める狙いがあった。

【戦略】

ウォーミングアップから力を抜くことを意識し、関節の可動域を高めるための体操や柔軟などを、踊りを揃えるように統一させ、丁寧に行った。

基礎的な動きをチームで揃えることにより、動きのニュアンスや、リズムのとり方などが演技の中でも統一されていった。

日々の練習から、大会の日まで同じメニューに取り組んでから踊ることで、練習と本番での差をなくし、落ち着いて演技に挑める状態を作り込んだ。

おわりに

2019年6月10日に「第21回尚美学園大学女子チアダンス部定期総会」が開催された。創部以来、VERITASは1チームで大会にエントリーしてきたが、部員数の増加に伴い、同じ大会に部門を変えて2チームエントリーすることが現実となってきた。そこで、2チーム体制をとるときにチーム名をどのようにするか、検討が行われた。複数チームがエントリーする場合、大学によりさまざまなチーム名の工夫がみられる。チーム名VERITASが「真理」を意味することから、前後や優劣を連想させるものは避けることとし、チームとしての一体感を表すことができる名称を検討した。

2019年3月に開催されたUSA School & College Nationals Competitions 2019に、VERITASはPom部門で出場した。その時の作品のテーマは、虹であった。虹は、日本では、赤・橙・黄・緑・青・藍・紫の7色とされる。だが、世界中の人々が虹を7色と認識しているわけではない。虹の色の数は、文化によりさまざまである。鈴木孝夫は、『日本語と外国語』の中で、「人類の数多い文化を、すべて価値の上で対等なものと考え、それぞれの文化に固有な神話や世界観、生活様式や価値の構造などを、相対的な枠組みの中で解明することを基本的な姿勢とする文化人類学では、虹の色が民族によって異なって把握されているという事実を見逃さなかった」［鈴木1990：65］とし、言語文化の相対性を示す虹の数にまつわるさまざまな例を述べている。虹を何色に分類するかについては、結局のところ正解はない。人間は、言語を獲得したことにより連続したスペクトルの変化を、言葉を使って不連続なものとして捉えてきた。色の違いに優劣はなく、全体が一つにまとまることにより、虹は構成される。そこで、虹の両端の色をチーム名VERITASに加えることにより、虹になぞらえて、VERITASとしての一体感を示すことにした。「VERITAS RUBRA」と「VERITAS VIOLA」である。RUBRAルブラは赤を、VIOLAビオラは紫を意味し、いずれもVERITAS同様、ラテン語[29]である。RUBRAはルージュ、VIOLAはバイオレットの語源となっている。

2019年度は、エントリーした国内大会において原則としてこの2チーム体制をとった。部員は予めどちらかのチームに所属しているわけではなく、エントリーする大会ごとにオーディションを行い、部員の適性を見ながらエントリー部門を決めた。また、一部の大会でダブルエントリーを行うなど、RUBRAもVIOLAもそれぞれの部門でVERITASとしての最高のパフォーマンスができるように臨んだ。そうした中で、全員が同じステージに立ちたいという希望もあり、USA Regionals 2020埼玉大会では、38人全員で大学編成Jazz部門のステージに立った。

2020年2月19日、2年ぶり5度目となるアメリカ遠征から帰国して間もなく、世界中を席巻することになる新型コロナウイルス感染症に対するチームとしての対応が求められていくこととなった。すでに、練習再開へ向けてのガイドライン、大会実施内容の大幅な変更など、現在公表されている内容以上に今後のチアリーディング／スポーツチアの世界に未知の変化が生じる可能性がある。そうした中でも、決して変化しないものがある。どのような時でも、どのような場所にあっても変わらず存在してきたもの、それがチアスピリットである。笑顔で人々を応援しともに元気になっていく、共感し他者を想う心である。そして、人間の社会は、時代や地域を越えて、

図6　VERITASロゴ（RUBURAとVIOLA）
（出所）VERITAS 11期　金子泉デザイン（原画カラー）

(29)　ラテン語については、イタリア中世および初期ルネサンス美術史を研究されている金原由紀子教授にご教示いただいた。

さまざまな感染症と対峙してきた。チアスピリットとともに、心に留めておきたい言葉がある。アルジェリアのオランでペスト患者の治療を続けていった医師リユーの言葉である。「こんな考えはあるいは笑われるかもしれませんが、しかしペストと戦う唯一の方法は、誠実さということです」［カミュ1969：245］。

「チアダンス文化論Ⅱ」では、国内外の大会の作品研究の分析を中心に考察を進めていく。

参考文献

アラン（1972）（1928）／大木健訳『幸福論』評論社.（*Alain. Propos sur le bonheur.* Gallimard.）

アーラント, K,（ギリシャ語版監修）、荒井献、川島貞雄（日本語版監修）（2000）『四福音書対観表：ギリシャ語・日本語版』日本基督教団出版局.

市川雅・國吉和子（日付不詳）「舞踊・舞踊の定義」『日本大百科全書（ニッポニカ）』小学館. https://kotobank.jp/word/%E8%88%9E%E8%B8%8A-125843　2018年８月31日閲覧.

市川雅・國吉和子（日付不詳）「舞踊譜dance notation」『日本大百科全書（ニッポニカ）』小学館. https://kotobank.jp/word/%E8%88%9E%E8%B8%8A%E8%AD%9C-125853#E6.97.A5.E6.9C.AC.E5.A4.A7.E7.99.BE.E7.A7.91.E5.85.A8.E6.9B.B8.28.E3.83.8B.E3.83.83.E3.83.9D.E3.83.8B.E3.82.AB.29 2018年８月31日閲覧.

稲村徹元・高木浩子（1989）「『真理がわれらを自由にする』文献考」『参考書誌研究』第35号 pp.1-7 国立国会図書館.

ウィリアムズ, R.／椎名美智ほか訳（2002）『キーワード辞典 KEYWORDS: A vocabulary of culture and society』平凡社.

カミュ, A.／宮崎嶺雄訳（1969）（1947）『ペスト』新潮社（*Camus, A. La Peste.* Éditions Gallimard.）

川端康雄（2014）「真理は生の道：ラテン語銘文VERITAS VIA VITAEの文意についての一考察」『日本女子大学紀要』63 pp.49-58 日本女子大学文学部.

ギアーツ, C.／吉田禎吾・中村弘允ほか訳（1987）（1933）『文化の解釈学1, 2』岩波書店.（Geertz, Clifford *The Interpretation of Cultures.* Fontana Press.）

クレイン, D. & M. ジュディス／鈴木昌ほか訳（2010）『オックスフォード　バレエダンス事典』平凡社.

島崎恒藏（2013）「VERITAS VIA VITAEと大学図書館」『図書館だより』No.146 pp.1-2 日本女子大学図書館.

小学館（2002）『ランダムハウス英語辞典』小学館 Version1.50 CD-ROM.

鈴木孝夫（1990）『日本語と外国語』岩波書店.

坪内逍遥（1977）（1907）「日本舞踊の現在及び将来」（明治40年）『逍遙選集　第三巻』pp.654-670 第一書房.

中村美奈子（2002）「舞踊記譜法：用途、歴史、分類、そして応用」『アート・リサーチ』Vol.2 pp.89-100 立命館大学.

長倉富貴（2018）「全米大学体育協会（NCAA）の『学業とスポーツの両立』を可能とさせる仕組み」『経営情報学論集』第24号 pp.33-44 山梨学院大学.

日本女子大学図書館（2019）『図書館だより』No.165.

日本聖書協会（1996）『聖書：新共同訳』.

羽仁五郎（1981）『図書館の論理―羽仁五郎の発言』日外アソシエーツ.

松尾博一ほか（2018）「米国におけるNational Collegiate Athletic Association（NCAA）の歴史的変遷」『大学体育研究』40巻 pp.47-64 筑波大学体育センター.

文部科学省（2018）「参考資料③NCAAが実施する学生アスリートに対する支援」 https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/016_index/bunkabukai001/shiryo/__icsFiles/afieldfile/2018/02/14/1400025_005.pdf　2019年３月10日閲覧.

早稲田大学競技スポーツセンター（日付不詳）「早稲田アスリートプログラム」 https://www.waseda.jp/inst/athletic/wasedasports/program/　2020年７月28日閲覧.

ICU（2018）“History of The Sport of Cheer.”https://cheerunion.org.ismmedia.com/ISM3/std-content/repos/Top/docs/ICU_History_2018.pdf pp.1-5　2019年２月10日閲覧.

Leonard C.（2013）“Now We Know Em.”https://nowweknowem.wordpress.com/2013/11/02/university-of-minnesota-student-johnny-campbell-began-leading-cheers-at-the-schools-football-game-against-northwestern-today-in-1898-making-campbell-the-very-first-cheerleader-and-november-2/　2020年3月30日閲覧.

NCAA（n.d.）“NCAA：OUR PRIORITIES.” http://www.ncaa.org/about/what-we-do/academics　2020年7月28日閲覧.

NCAA（n.d.）“NCAA：REWARDING TEAM SUCCESS.” http://www.ncaa.org/about/what-we-do/academics 2020年7月28日閲覧.

Oxford（1989）The Oxford English Dictionary（OED）. second ed. Clarendon Press, Oxford.

Satanovsky, Gary（n.d.）“Johnny Campbell invents cheerleading.” http://www.famousdaily.com/history/cheerleading-started-at-university-minnesota.html　2020年3月30日閲覧.

Tylor, Edward Burnett（1871）*Primitive Culture: researches into the development of mythology, philosophy, religion, art, and custom.* John Murray & Co. London.

Urdang, Laurence（ed）（1986）*MOTTOES.* Gale Research Company. Detroit.